

別紙

子どもの教育・学びに関する調査分析 足立区・最終報告

牛島光一(筑波大学／システム情報系 社会工学域)

川村顕 (早稲田大学／政治経済学術院)

田中隆一 (東京大学／社会科学研究所)

別所俊一郎 (東京大学／経済学研究科)

研究代表者：野口晴子 (早稲田大学／政治経済学術院)

令和元年 6 月

目次

調査分析の概要.....	p.3
子どもの学力に関する分析結果	p.4-17
子どもの体力に関する分析結果	p.18-22
長期欠席に関する分析.....	p.23-30
学力定着のための事業に関する 児童生徒の追跡調査結果.....	p.31-39

1 子どもの学力に関する分析結果

1 分析手法

- ベースライン（小2時点）とエンドライン（中3時点）との標準スコアを比較した以下の4群と**総数の平均的な傾向**とを比較した（特に断りがない限り国語の成績データを用いている。）。

群D:
小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

群B:
小2時点では成績が25%以下の水準
→中3時点では50%より高い水準

		中3時点での国語の標準スコア				Total
		25%以下	25-50%以下	50-75%以下	75%+	
小2時点 での 国語の標 準スコア	25%以下	618	257	175	38	1,088
	25-50%以下	186	189	232	70	677
	50-75%以下	174	227	340	196	937
	75%+	77	167	429	586	1,259
	Total	1,055	840	1,176	890	3,961

群C:
小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準

群A:
小2時点・中3時点ともに成績
が75%より高い水準

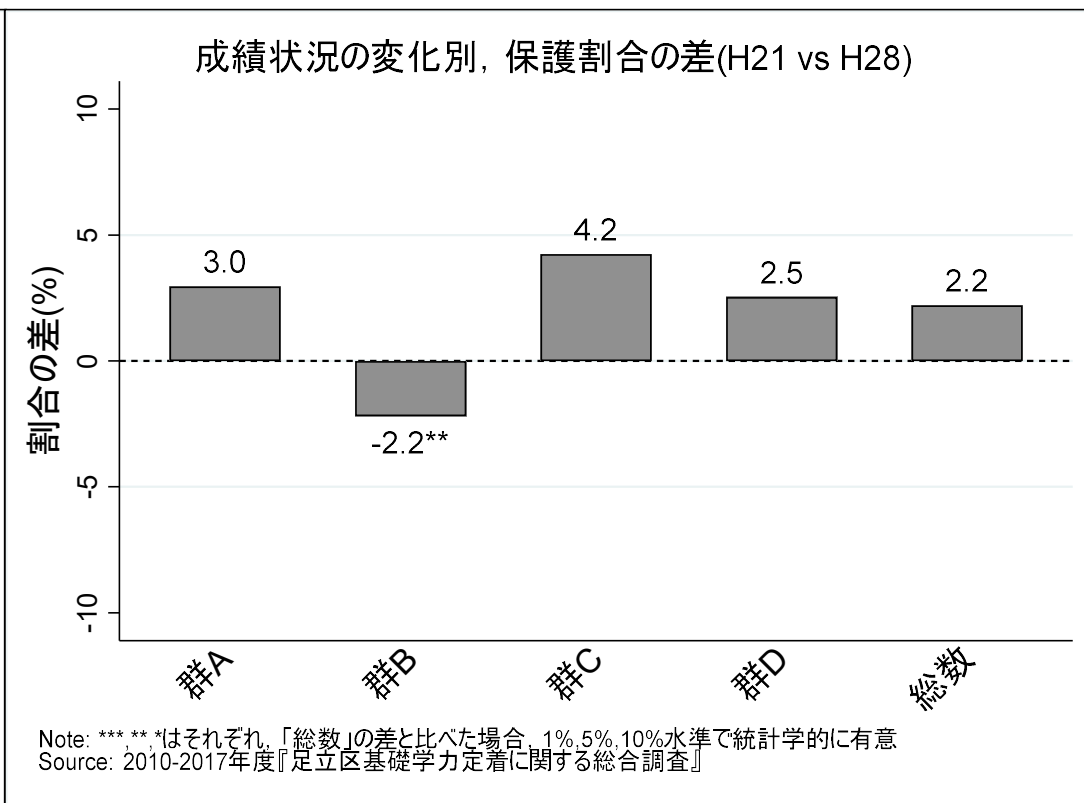
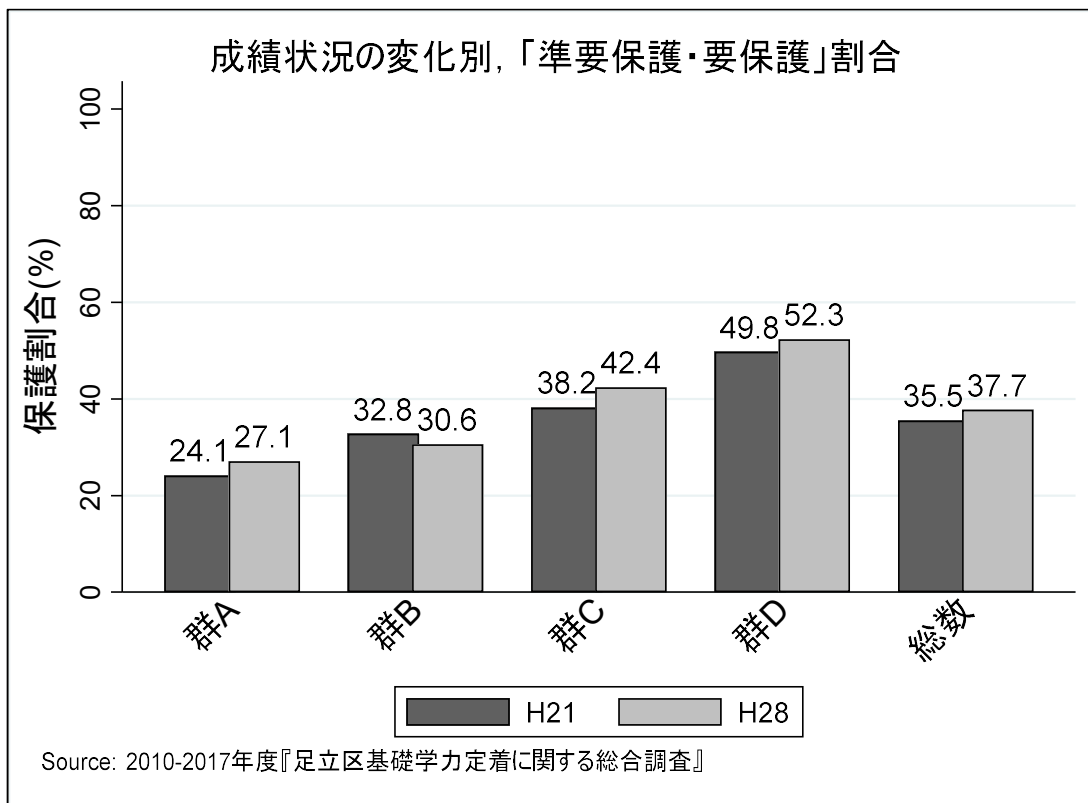
		中3時点での数学の標準スコア				Total
		25%以下	25-50%以下	50-75%以下	75%+	
小2時点 での 算数の標 準スコア	25%以下	655	423	281	192	1,551
	25-75%以下	203	232	215	240	890
	75%+	184	291	435	646	1,556
	Total	1,042	946	931	1,078	3,997

2 分析結果のまとめ

	項目	全体の傾向	個別分析結果
(1)	就学援助率	増加傾向	● 群Bのみ、保護率は有意に2.2%減少傾向にある。
(2)	朝食摂取率	減少傾向	● 群Bでは、有意に1.1%増加傾向が観察された。 ● 群C及び群Dで有意に、それぞれ4.7%、9.7%と、大幅に朝食摂取率が減少傾向にある。
(3)	「普段のテレビゲーム時間が90分以上」と回答した割合	増加傾向	● 有意差が観察されたのは群Cのみで、約30%比率が増加傾向にある。
(4)	通塾率	増加傾向	● 群Aや群Bで最も上昇傾向が見られ、約40%増加していた。群Cでは20.8%の増加にとどまり、群Dでは、増加率が最も低く11.7%となっている。
(5)	読書量（「1カ月に2-3冊読む」と回答した割合）	増加傾向	● 群Aや群Bと比べ、群Cと群Dでは増加率が低く、唯一、有意差が観察されたのは群Dであった。
(6)	「大人になった時の夢や目標を持っている」と回答した割合	減少傾向	● 有意に群Aにおいて最も減少幅が大きく22.3%で、有意に最も減少幅が小さいのが群Dで約12.8%であった。
(7)	「数学の問題で別の解き方を考える」と回答した割合	減少傾向	● 群A及び群Bではそれぞれ有意に14.8%、17.5%の減少幅にとどまっているが、群C及び群Dではそれぞれ有意に37.0%、31.7%と減少幅が大きい。
(8)	「何をどのように勉強してよいかわからない」と回答した割合	増加傾向	● 群Aでは有意に26.3%増加したのに比べ、群C及び群Dでは有意に約43%増加し、家庭での学習の悩みがより深刻化している傾向にある。
(9)	「勉強を教えてくれる人がいない」と回答した割合	増加傾向	● 群Bでは0.6%と有意に最も少なく、群Cと群Dで、有意に約6.5%前後増加するなど、勉強を教えてくれる人がいないという家庭での学習の悩みがより深刻化している傾向にある。

(1) 就学援助率の変化

- ▶ 小2と中3を比較すると、全般的に就学援助率が増加傾向にある。
- ▶ 群Bのみ、保護率は有意に2.2%減少傾向にある。

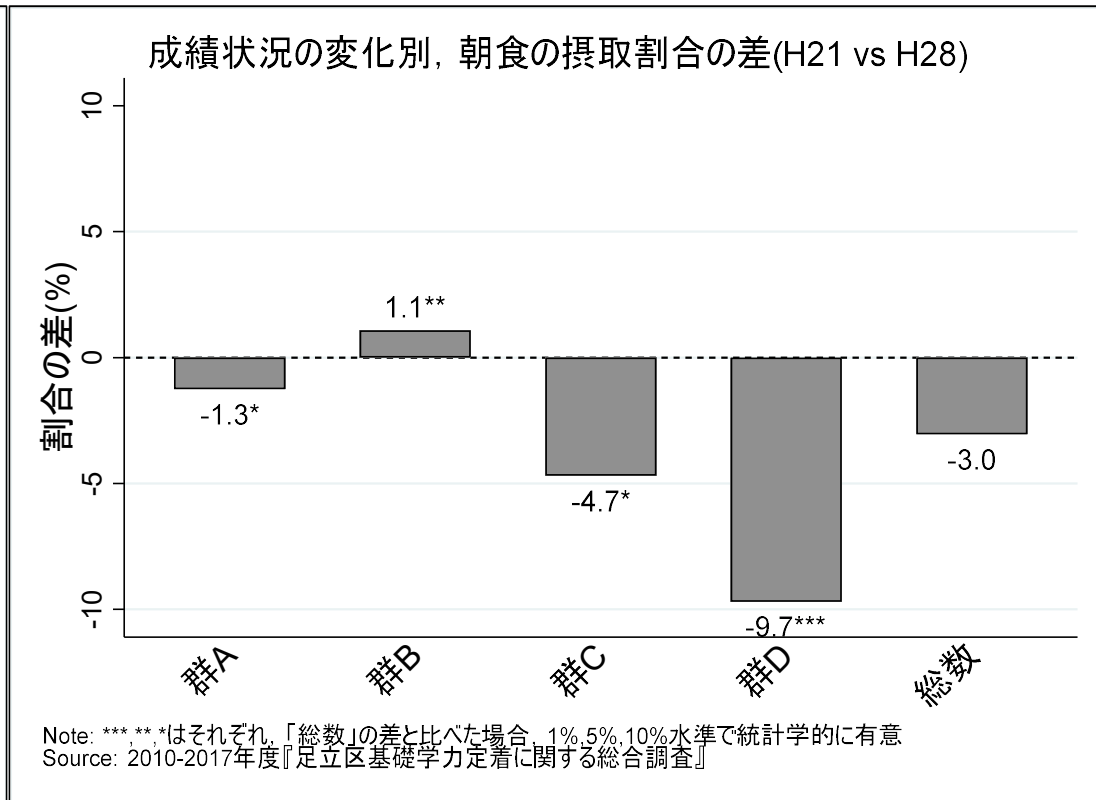
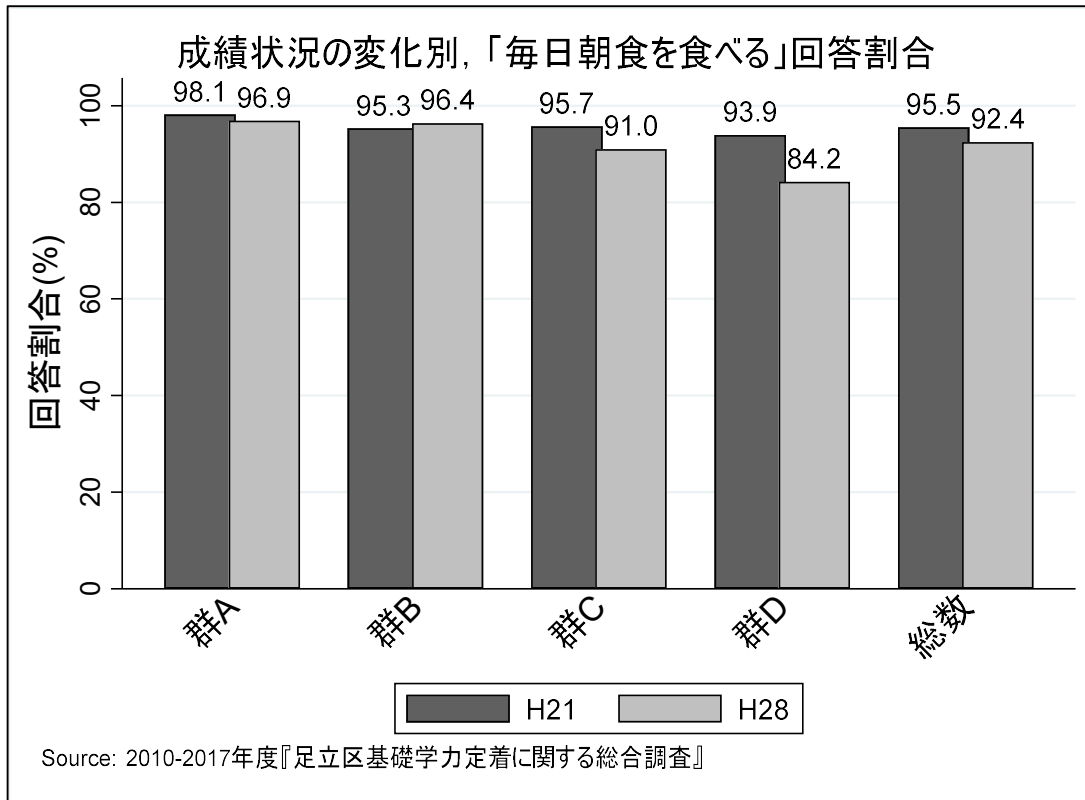


群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(2) 生活習慣の変化 (朝食)

- ▶ 小2と中3を比較すると、全般的に朝食摂取率は減少傾向にある。
- ▶ 群Bでは、有意に1.1%増加傾向が観察された。他方、群C及び群Dで有意に、それぞれ4.7%、9.7%と、大幅に朝食摂取率が減少傾向にある。



群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準

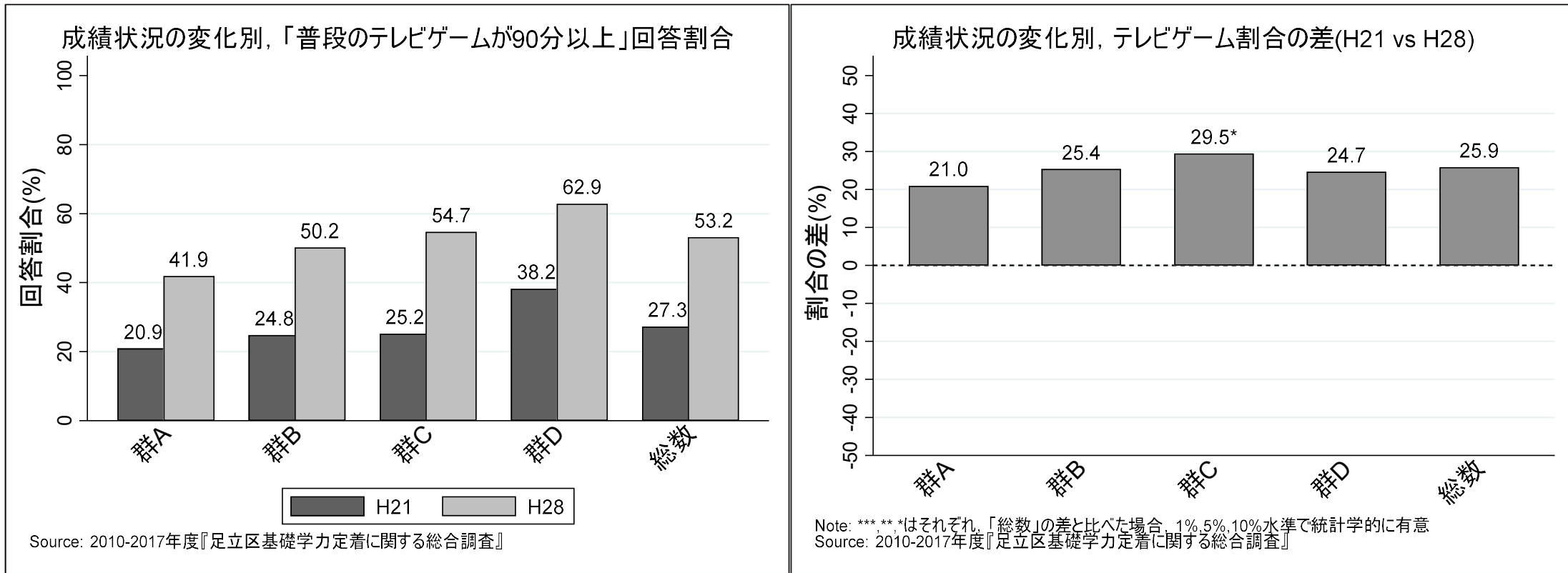
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準

群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(3) 生活習慣の変化（普段のテレビゲームが90分以上）

- ▶ 小2と中3を比較すると、全般的に「普段のテレビゲーム時間が90分以上」と回答する割合が増加傾向にある。
- ▶ 有意差が観察されたのは群Cのみで、約30%比率が増加傾向にある。

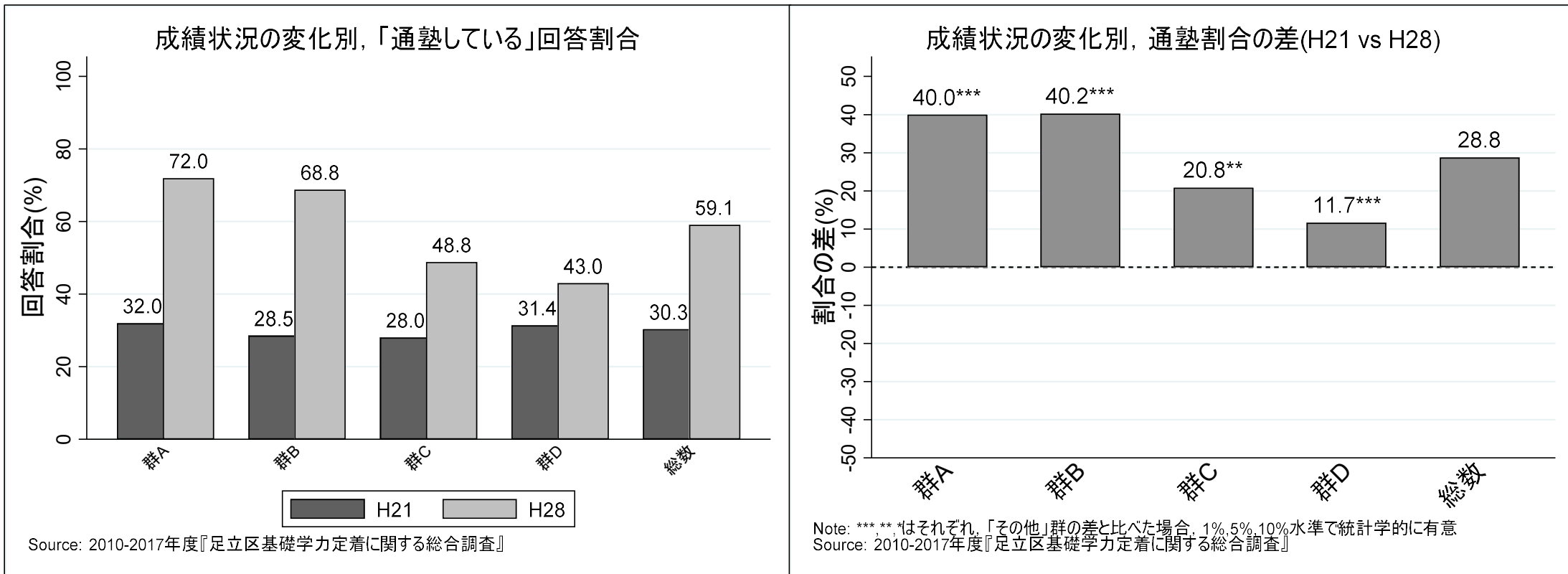


群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(4) 通塾率の変化

- 小2と中3を比較すると、全般的に通塾率が増加傾向にあることがわかる。
- 群Aや群Bで最も増加傾向が見られ、約40%増加していた。他方、群Cでは20.8%の増加にとどまり、群Dでは、増加率が最も低く11.7%となっている。



群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準

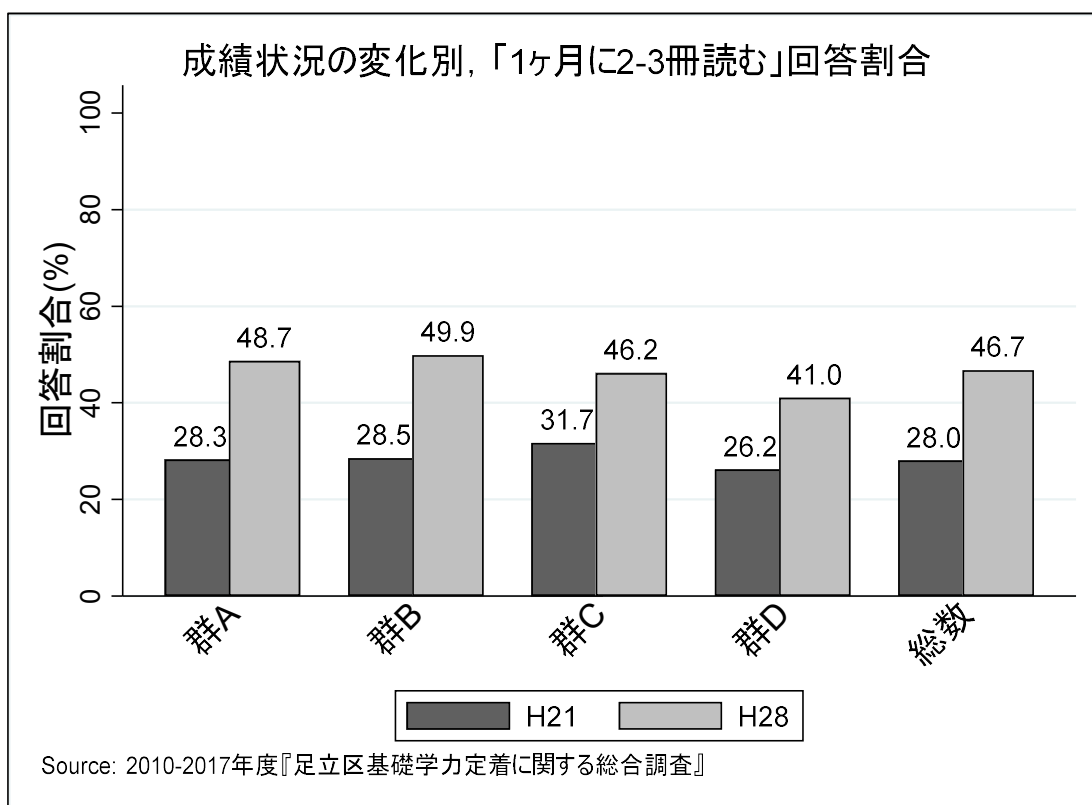
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準

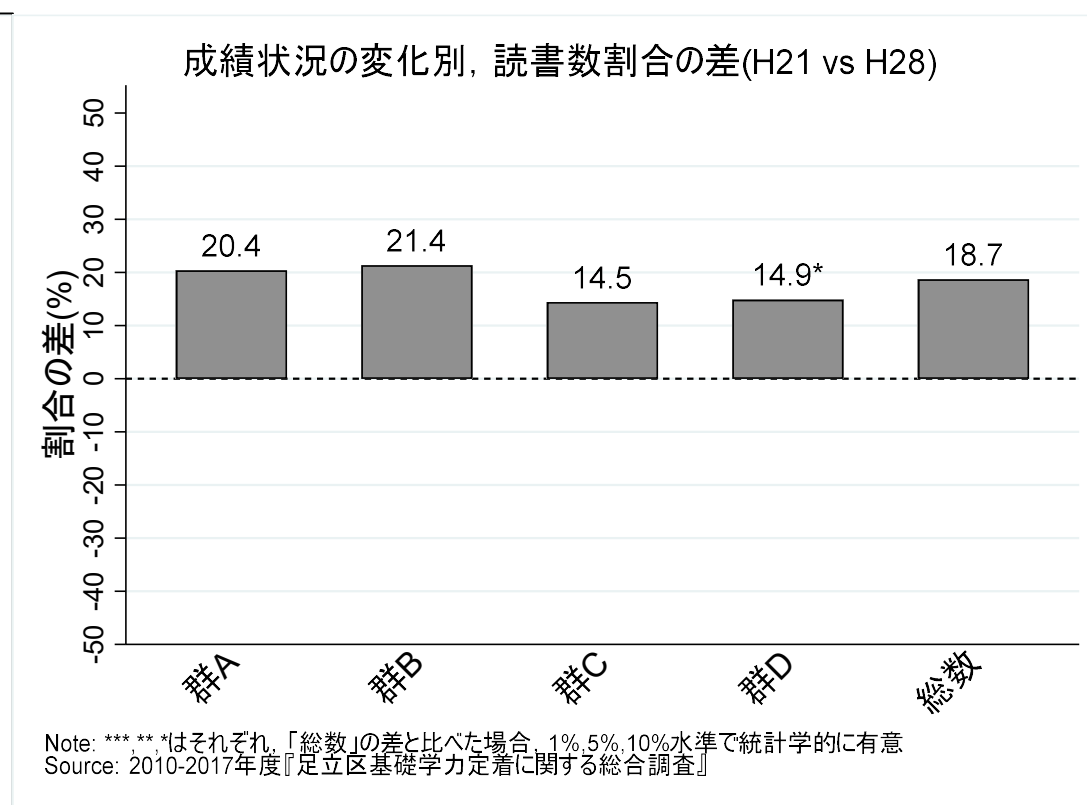
群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(5) 読書量（1カ月に2-3冊読む）の変化

- ▶ 小2と中3を比較すると、全般的に「1カ月に2-3冊読む」と回答した割合が増加し、読書量が増加傾向にある。
- ▶ 群Aや群Bと比べ、群Cと群Dでは増加率が低く、唯一、有意差が観察されたのは群Dであった。



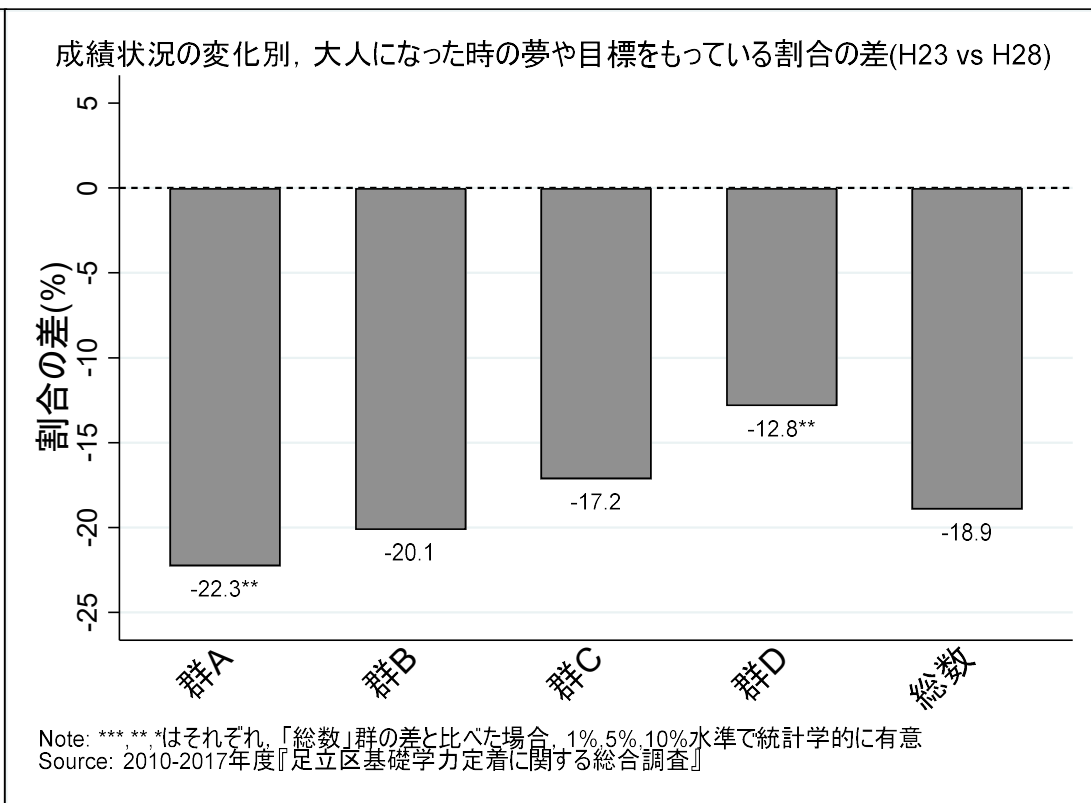
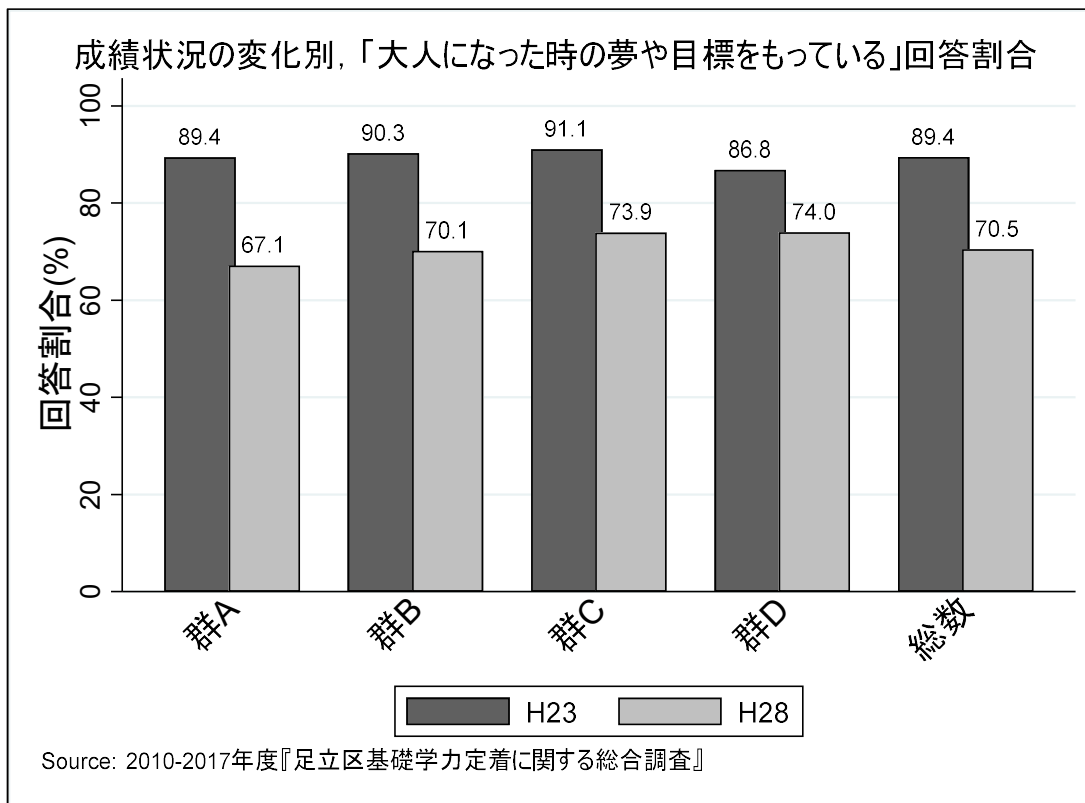
群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
 群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準



群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
 群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(6) 「大人になった時の夢や目標を持っている」

- ▶ 小4と中3を比較すると、全般的に「大人になった時の夢や目標を持っている」割合は減少傾向にある。
- ▶ 群Aでは有意に最も減少幅が大きく22.3%であったのに対し、群Dでは有意に最も減少幅が小さく約12.8%であった。

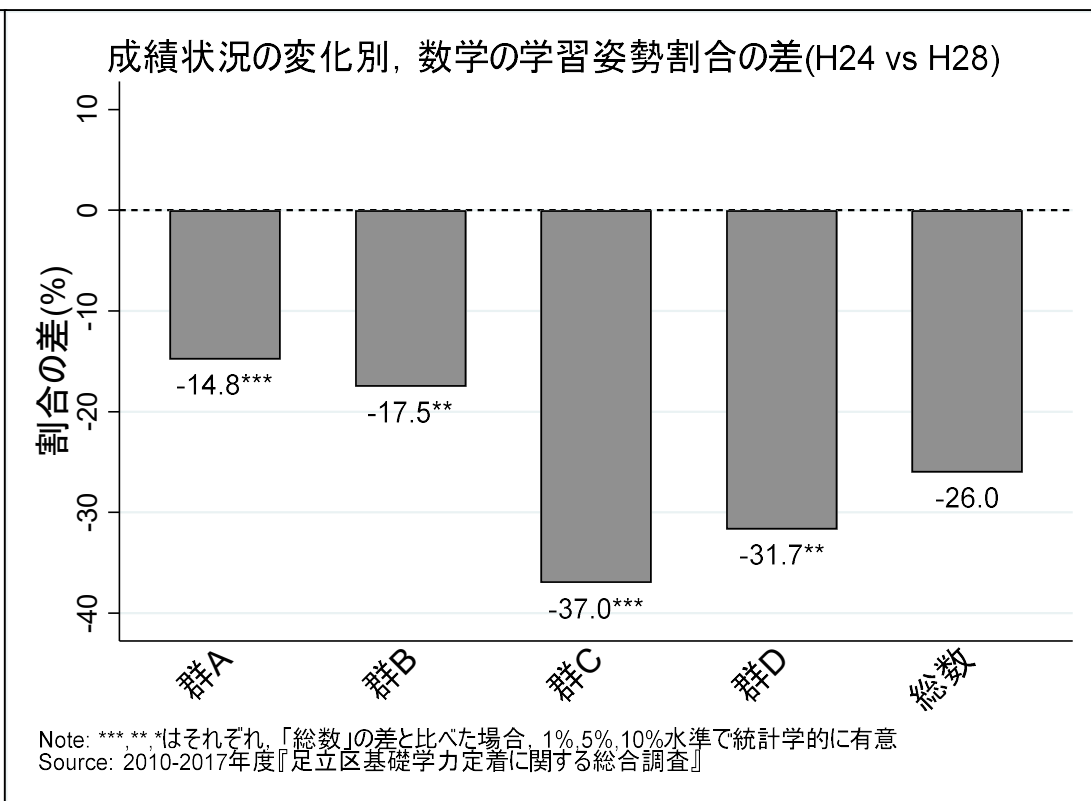
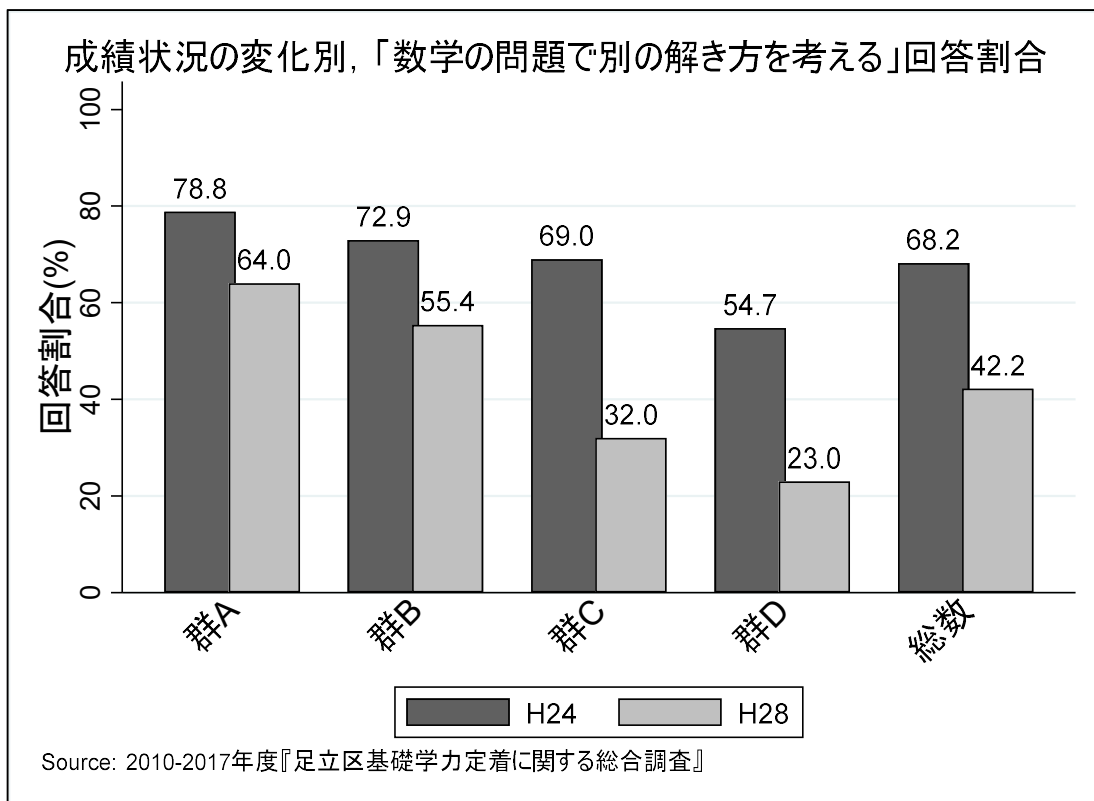


群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(7) 数学の学習姿勢の変化

- 小5と中3を比較すると、全般的に「数学の問題で別の解き方を考える」割合は減少傾向にある。
- 群A及び群Bではそれぞれ有意に14.8%、17.5%の減少幅にとどまっているが、群C及び群Dではそれぞれ有意に37.0%、31.7%と減少幅が大きい。

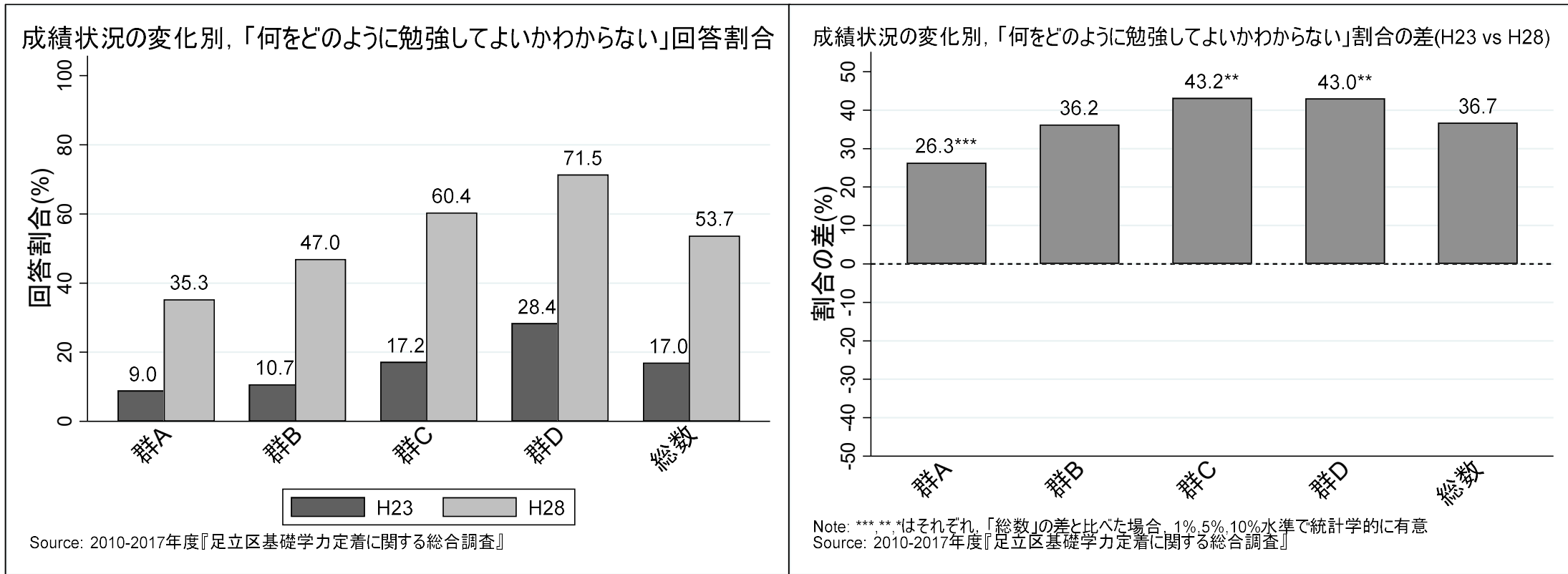


群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(8) 「何をどのように勉強してよいかわからない」

- ▶ 小4と中3を比較すると、全般的に「何をどのように勉強してよいかわからない」割合は増加傾向にある。
- ▶ 群Aでは有意に26.3%増加したのに比べ、群C及び群Dでは有意に約43%増加し、家庭での学習の悩みがより深刻化している傾向にある。



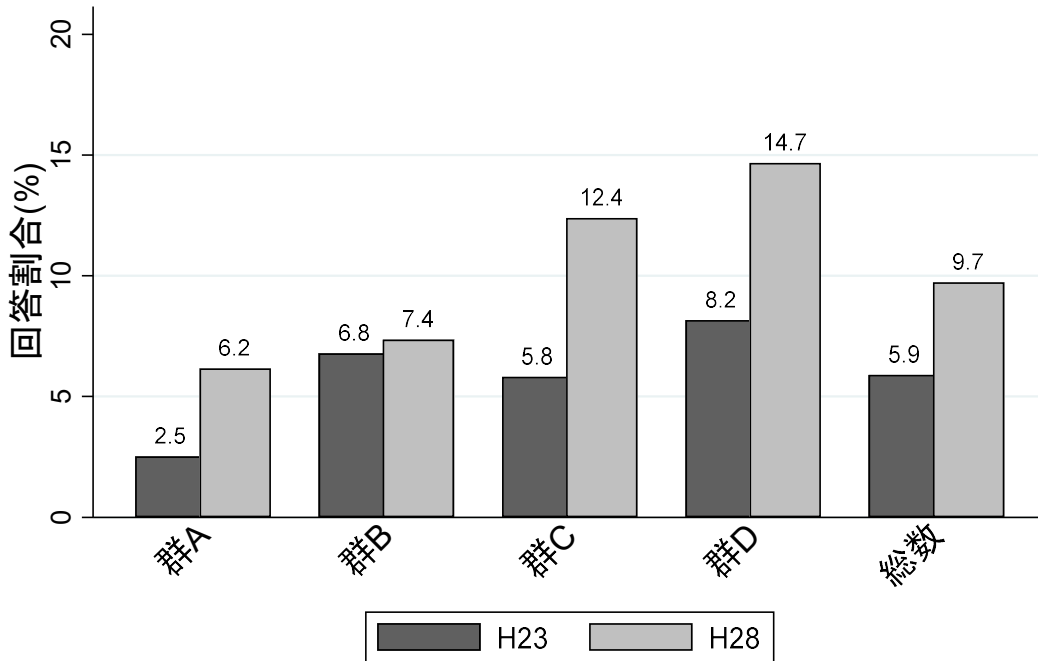
群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

(9) 「勉強を教えてくれる人がいない」

- ▶ 小4と中3を比較すると、全般的に「勉強を教えてくれる人がいない」割合は増加傾向にある。
- ▶ 群Bでは0.6%と有意に最も少なく、群Cと群Dで、有意に約6.5%前後増加するなど、勉強を教えてくれる人がいないという家庭での学習の悩みがより深刻化している傾向にある。

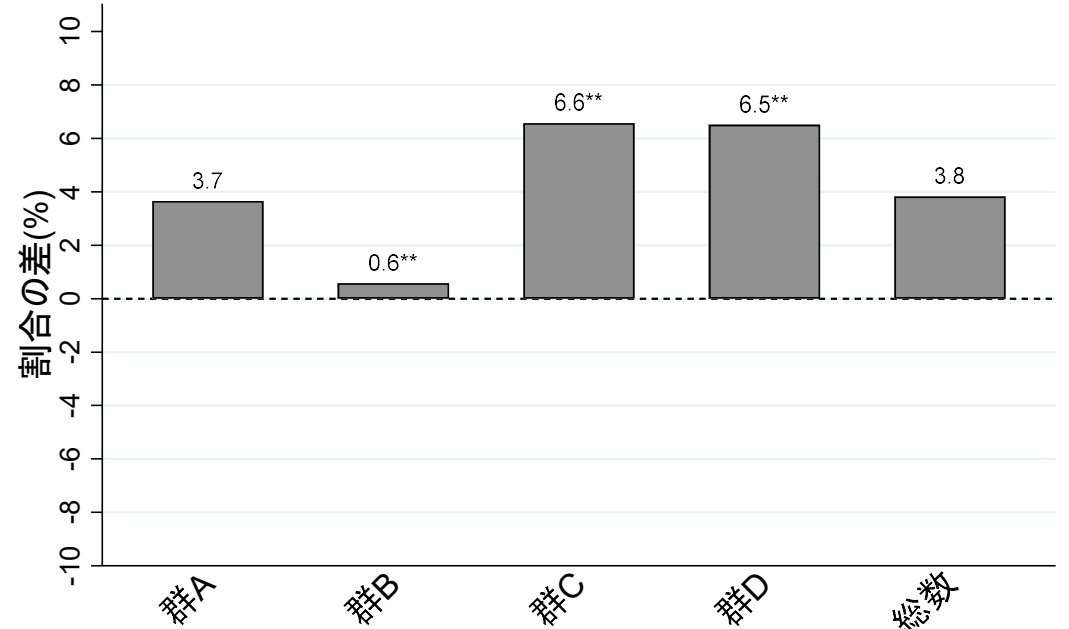
成績状況の変化別、「勉強を教えてくれる人がいない」回答割合



Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』

群A：小2時点・中3時点ともに成績が75%より高い水準
 群B：小2時点では成績が25%以下の水準→中3時点では50%より高い水準

成績状況の変化別、「勉強を教えてくれる人がいない」割合の差(H23 vs H28)



Note: ****はそれぞれ、「総数」群の差と比べた場合、1%、5%、10%水準で統計学的に有意
 Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』

群C：小2時点では成績が75%より高い水準→中3時点では50%以下の水準
 群D：小2時点・中3時点ともに成績が25%以下の水準

【参考】 学力効果の計測

1 学力効果

同じ先生に教わった小学校児童の基礎学力テストの平均点

- ・先生が学力をどれだけ伸ばしたのかの指標（学校の違いや年度の違い、生徒の違いを考慮）
- ・東京都での教歴の効果は含まれない（別に計測）
- ・平均的な先生の学力効果を0と基準化して、ばらつきを計測

2 わかったこと

学力効果には先生間でばらつきがある

学力効果が下位15パーセントの先生が平均的な先生になると、児童の算数の偏差値（※）が2.3、国語の偏差値（※）が2.6上がる。

3 足立区における教歴の効果

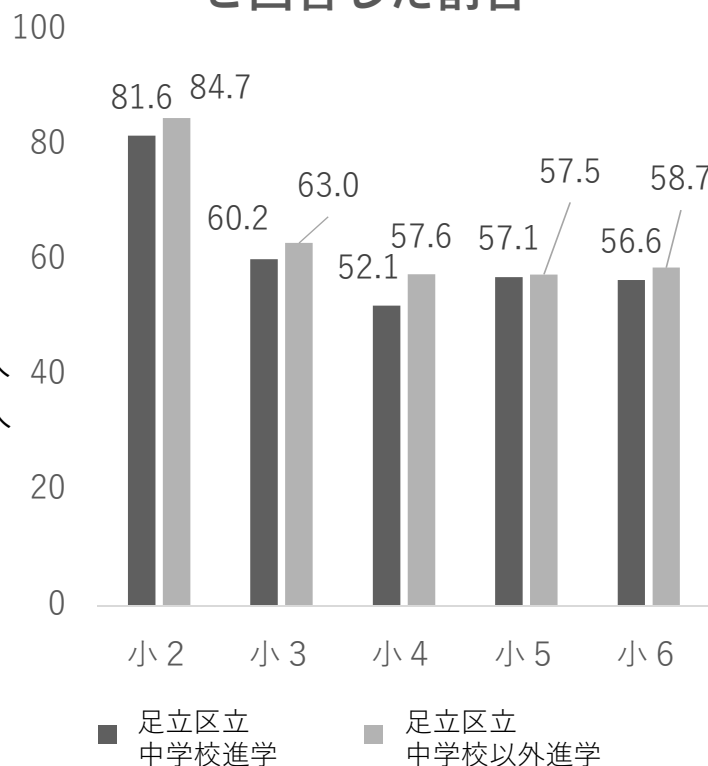
- （1）同じ東京都での教員経験年数を持つ教員間の比較において、足立区における教歴の長い教員の方が、他の自治体での教歴の長い教員に比べて学力効果が高い。
- （2）足立区における教歴が1年伸びると、児童の国語の偏差値（※）は0.7、算数の偏差値（※）は0.5上昇する。

（※）ここで言う「偏差値」は、いずれも平均を50とした偏差値を指す。

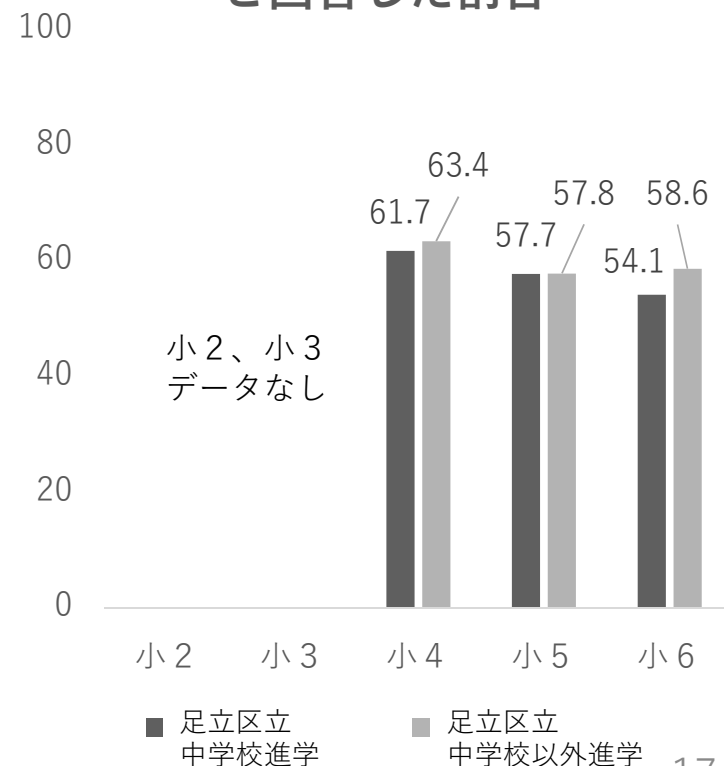
【参考】 足立区立中と区立中以外進学者の特徴：「学校に行くことが楽しい」など

- ▶ 学校・先生の教え方に対する満足度に差はない。
- ▶ 小学校段階では、学校の状況が進路決定に影響しているとは考えにくい。

学校に行くのが「楽しい」と回答した割合



先生の教え方に「とても満足している」と回答した割合



平成26年度に
小学校6年生だった世代の
意識調査の回答の推移

小学校6年時における人数
足立区立中学進学者数：4,287人
足立区立以外進学者数： 843人

他の学年においても同等の人数

2 子どもの体力に関する分析結果

体力についての分析手法・分析結果

1 分析手法

平成25年度～29年度の体力調査データについて、学齢簿・就学援助データ・学力調査データと突合し、男女別、学年別、就学支援状態別に分布を作成して分析した。

(1) 体格

「肥満度」($(\text{児童/生徒の体重} - \text{標準体重}) \div \text{標準体重}$)で測定。

(2) 体力

「体力合計点」(測定項目各10点×8項目=80点満点)で測定。

※ 小学校と中学校とでは測定項目と得点の基準が異なることに注意

(3) コホート

5年分の変化を追跡できるので、25年度を初年度とする4つのコホート(小2→小6、小3→中1、小4→中2、小5→中3)を作成した。

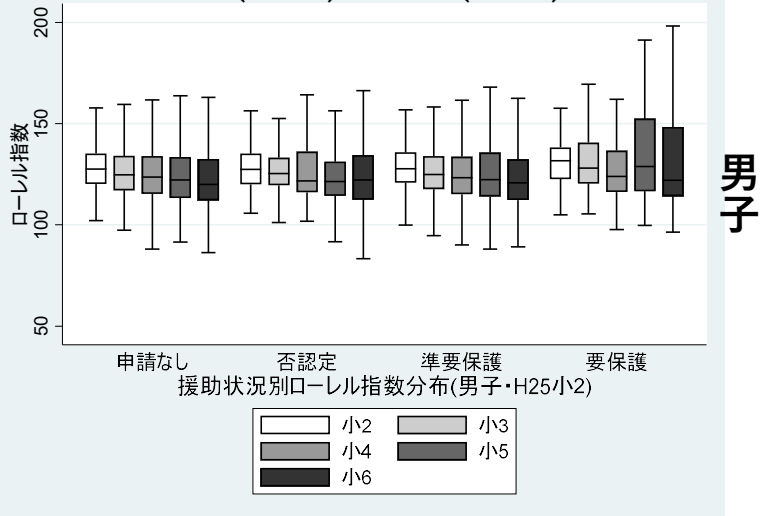
2 分析結果のまとめ

(1) 要保護世帯の児童生徒の分布が他と異なる(肥満度が高め)傾向にある。

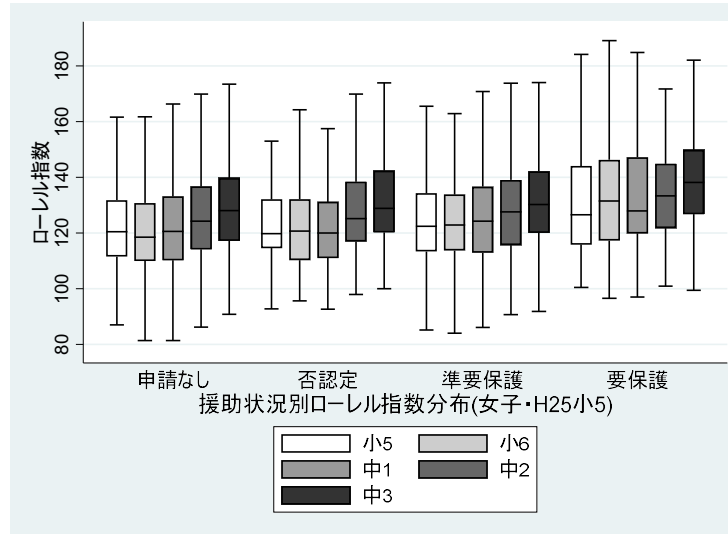
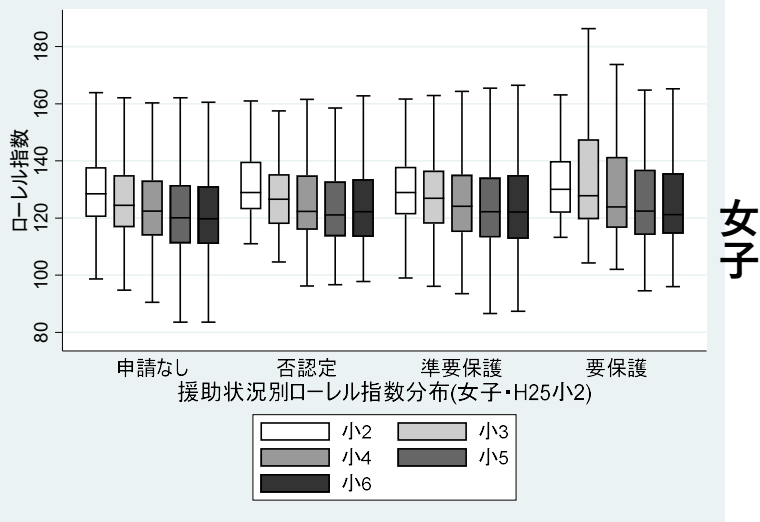
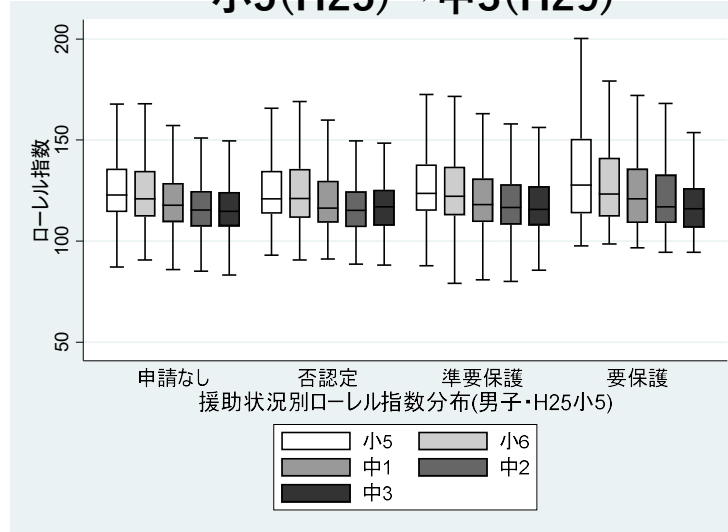
(2) 就学援助状況による体力合計点の違いがあるという証拠はない。

(1) 「肥満度」分布の状況

小2(H25)→小6(H29)



小5(H25)→中3(H29)



➤ 「肥満度」は「ローレル指数 (体重(kg) ÷ 身長(cm)³ × 10⁷)」で測定している。
⇒ 160以上が「肥満」と定義される

➤ 5年分の変化を追跡できるので、H25年度を初年度とする4つのコホート（小2→小6、小3→中1、小4→中2、小5→中3）を作成

➤ 要保護世帯の児童生徒の分布が他と異なる（肥満度が高め）傾向にある。

➤ 左表のほか、小3→中1、小4→中2でも同様の傾向が見られる。

(2) 「体力合計点」分布の状況

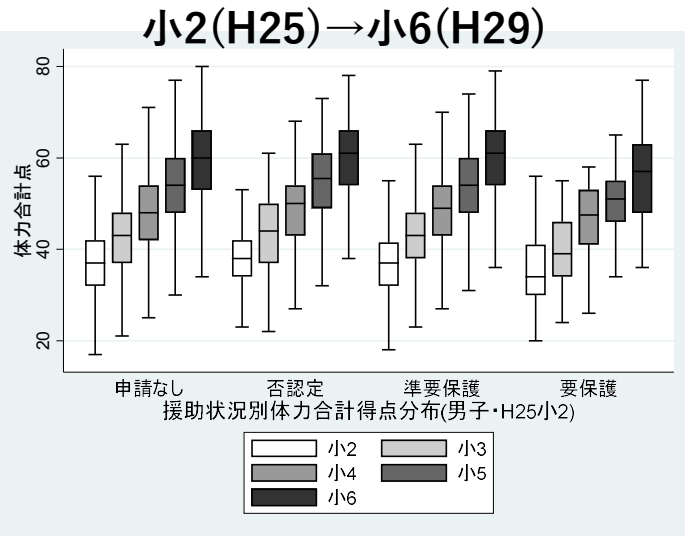
➤ 「体力合計点」は（測定項目各10点×8項目＝80点満点）で測定している。

➤ ただし、小学校と中学校とでは測定項目と得点の基準が異なり、同一項目であっても点数の基準が変わることに注意（小中間で比較はできない）。

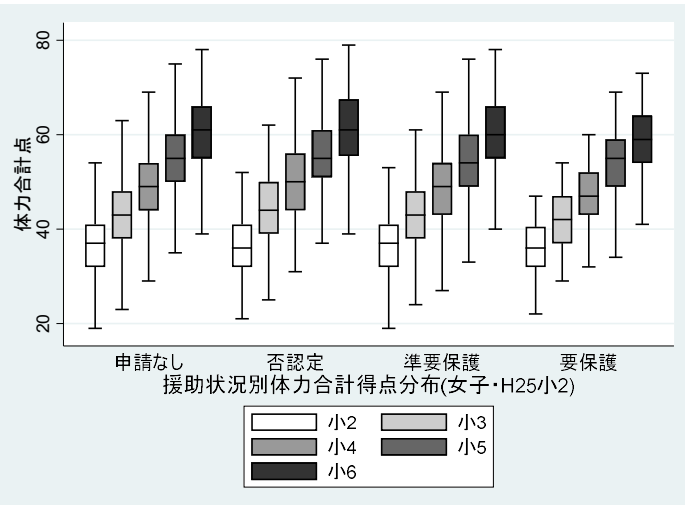
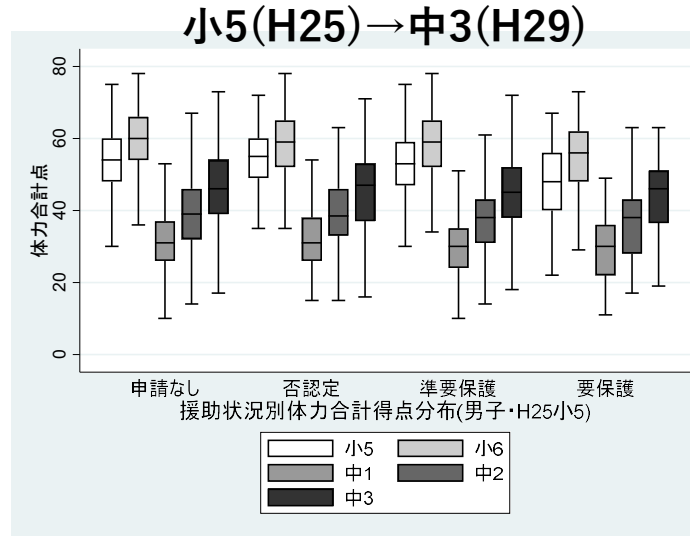
➤ 5年分の変化を追跡できるので、H25年度を初年度とする4つのコホート（小2→小6、小3→中1、小4→中2、小5→中3）を作成

➤ 就学援助状況による体力合計点の違いがあるという証拠はない。

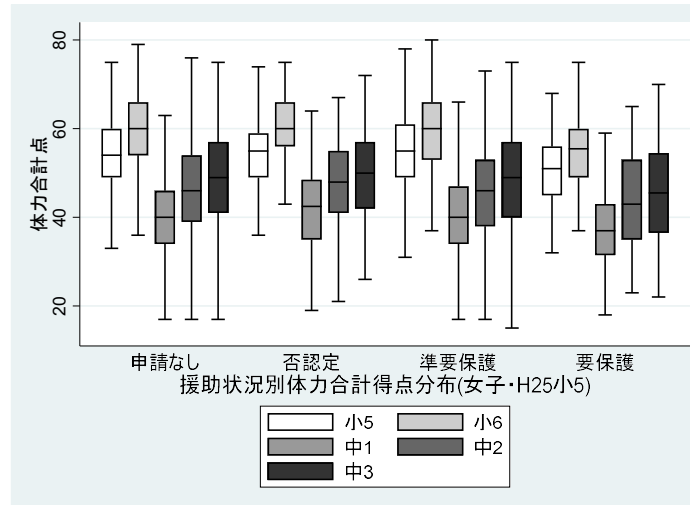
➤ 左表のほか、小3→中1、小4→中2でも同様の傾向が見られる。



男子



女子



【参考】 体力と学力等との関連性の推定

- データと推定方法

- ✓ 体力：各種目合計点を平均を50とした場合の偏差値換算
- ✓ 各生徒児童がもつ異なる背景要因を調整

- 体力合計点(全国偏差値)への各変数の影響

学力が体力と正の関係

- ✓ 国語偏差値：1増えると体力偏差値が0.02増える
- ✓ 算数/数学偏差値：1増えると体力偏差値が0.06増える
- ✓ 肥満度(ローレル指数 ≥ 160 かどうか)：肥満だと体力偏差値が1.9減る
- ✓ 運動部に所属しているか：所属していると体力偏差値が0.75増える
- ✓ 就学援助状況：統計的に有意な違いは観察されない

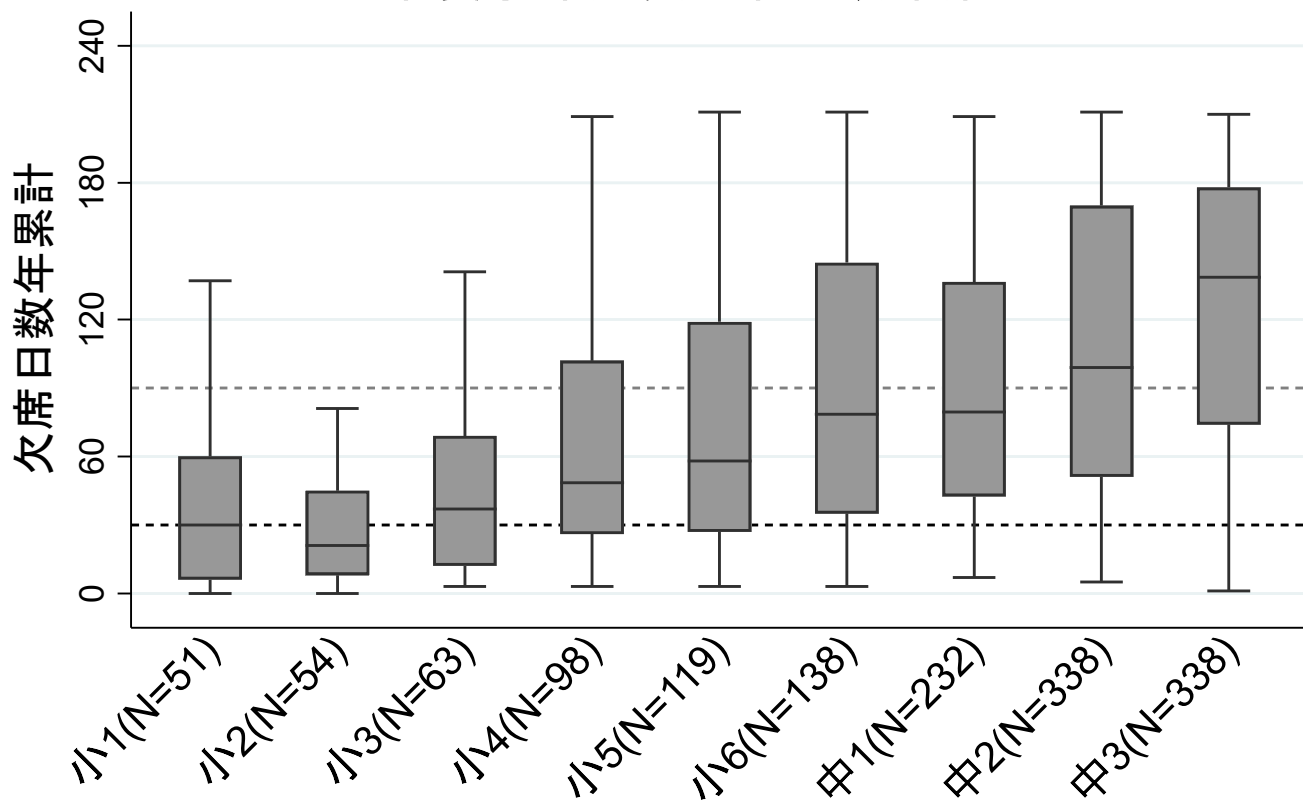
3 長期欠席に関する分析

長期欠席状況についてのまとめ

	項目	個別分析結果
(1)	学年別長期欠席状況	<ul style="list-style-type: none"> ● H29年度の長期欠席状況を見ると、高学年になるほど、1年間の欠席日数累計が長期化し、また、ばらつきが大きくなっている。 ● 小／中学校別の理由別の長期欠席状況を見ると、小・中学校で要因が異なっているが、「家庭に係る状況」だけは、小・中の両者での長期欠席の重要な要因となっている。
(2)	長期欠席状況別、直近3年間の偏差値	<ul style="list-style-type: none"> ● 小／中学校別・長期欠席状況別の偏差値を見ると、H29年度に「欠席日数30日以上」では、直近3年間の偏差値の中央値が全般的に低い傾向にある。 ● H29年度の長期欠席者の偏差値の中央値・ばらつきともに、直近3年間での統計学的に有意な変化は確認できない。
(3)	長期欠席状況「学業不振」別、直近3年間の偏差値	<ul style="list-style-type: none"> ● 「学業不振」理由での長期欠席者を見ても、小学校・中学校ともに、過去3年間の国語や算数／数学偏差値を見ると、中央値・ばらつきともにさほど大きな変化はなかった。
(4)	長期欠席状況別、直近3年間の学校に対する意識	<ul style="list-style-type: none"> ● 小／中学校別、長期欠席状況別に見ると、長期欠席記録のある児童生徒の方が、学校に行くのが楽しいと回答する比率が低い傾向にある。 ● 中学校では長期欠席記録のある児童生徒で、年々、「学校の勉強が楽しい／学校の授業は楽しい」と回答する比率が低下傾向にある。 ● 「毎日の朝食」「朝と夜の歯磨き」「睡眠時間」についても、同様の傾向にある。
(5)	長期欠席状況別、直近3年間の自己肯定感	<ul style="list-style-type: none"> ● 小／中学校別、長期欠席状況別に見ると、全般的に「自分にはよいところがある」と回答する割合が低い傾向にある。中学校では長期化するほど、経年的に自己肯定感が希薄化している。 ● 「夢や目標」「困難に立ち向かう態度」についても同様の傾向にある。

(1) 平成29年度における学年別長期欠席状況

H29年度学年別，欠席日数年累計



Source: 2017年度『H29長期欠席者リスト』

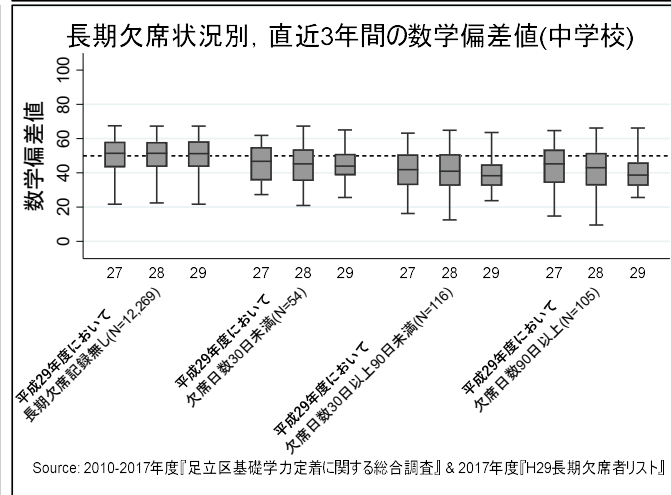
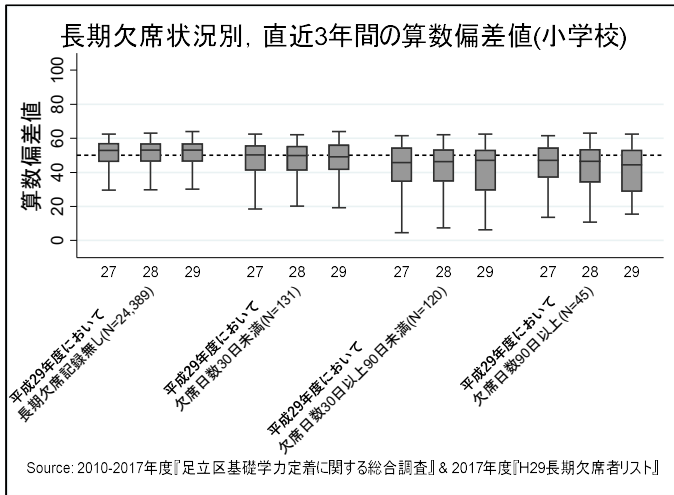
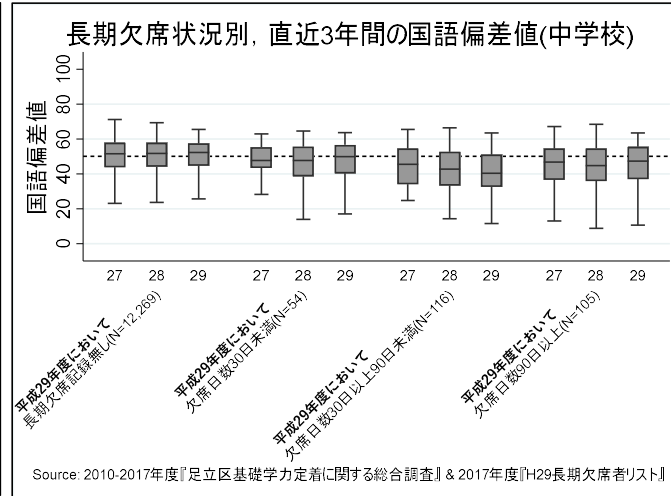
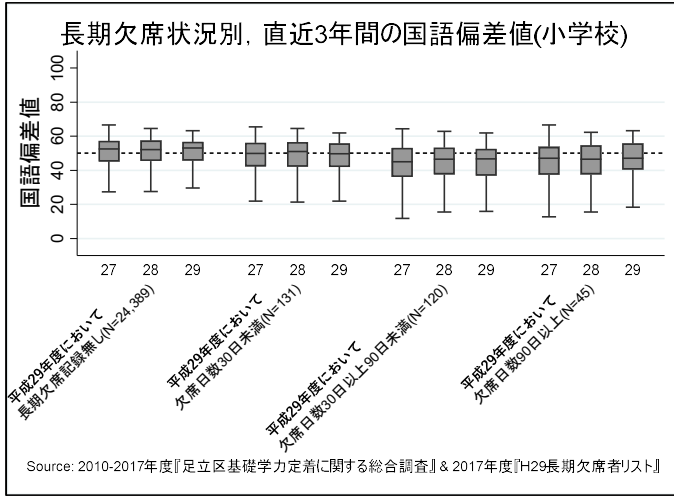
▶ 長期欠席記録を有する者で、学齡簿・就学援助・学力調査との突合が可能であった**1,431名**（小：**523名**、中学校：**908名**）を分析対象とする。

▶ H29年度の長期欠席状況を見ると、高学年になるほど、1年間の欠席日数累計が長期化し、また、ばらつきが大きくなっていることがわかる。

【小／中学校別の理由別の長期欠席状況】

- 小学校では「病気」、「家庭に係る状況」「いじめを除く友人関係」の順に多い。
- 中学校では、「家庭に係る状況」、「いじめを除く友人関係」、「学業不振」の順に多い。

(2) 小／中学校・長期欠席状況別、直近3年間の偏差値

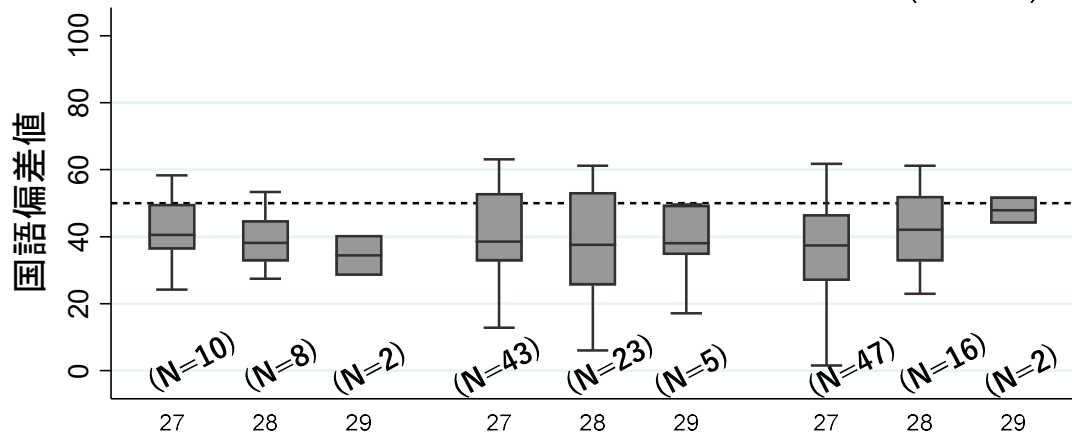


- 小／中学校別・長期欠席状況別の国語偏差値を見ると、H29年度に「欠席日数30日以上」では、直近3年間の偏差値の中央値が全般的に低い傾向にある。
- 他方、H29年度の長期欠席者の国語偏差値の中央値・ばらつきともに、直近3年間での統計学的に有意な変化は見られない。
- 算数／数学では、国語と同様、H29年度に「欠席日数30日以上」では、直近3年間の偏差値の中央値が全般的に低い傾向にある。
- 他方、H29年度の長期欠席者の算数／数学偏差値の中央値・ばらつきともに、国語と比べると直近3年間で若干の低下傾向にはあるが、統計学的に有意な変化があることは確認できなかった。

(3) 小／中学校・長期欠席状況「学業不振」別、直近3年間の偏差値

- ▶ 小／中学校別・教員が長期欠席の要因を「学業不振」とした児童生徒の国語偏差値の直近3年間の変化を見ても、欠席日数30日未満で低下傾向にある。欠席日数30日以上では統計学的に有意に大きな変化はない。
- ▶ 算数／数学偏差値についても、同様の傾向である。

長期欠席状況「学業不振」別、直近3年間の国語偏差値(小学校)



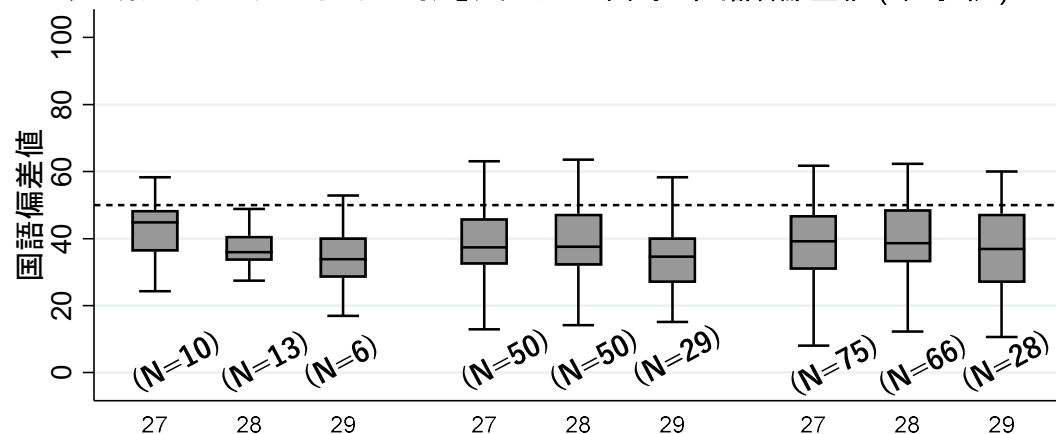
平成29年度において
欠席日数30日未満

平成29年度において
欠席日数30日以上90日未満

平成29年度において
欠席日数90日以上

Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』 & 2017年度『H29長期欠席者リスト』

長期欠席理由「学業不振」、直近3年間の国語偏差値(中学校)



平成29年度において
欠席日数30日未満

平成29年度において
欠席日数30日以上90日未満

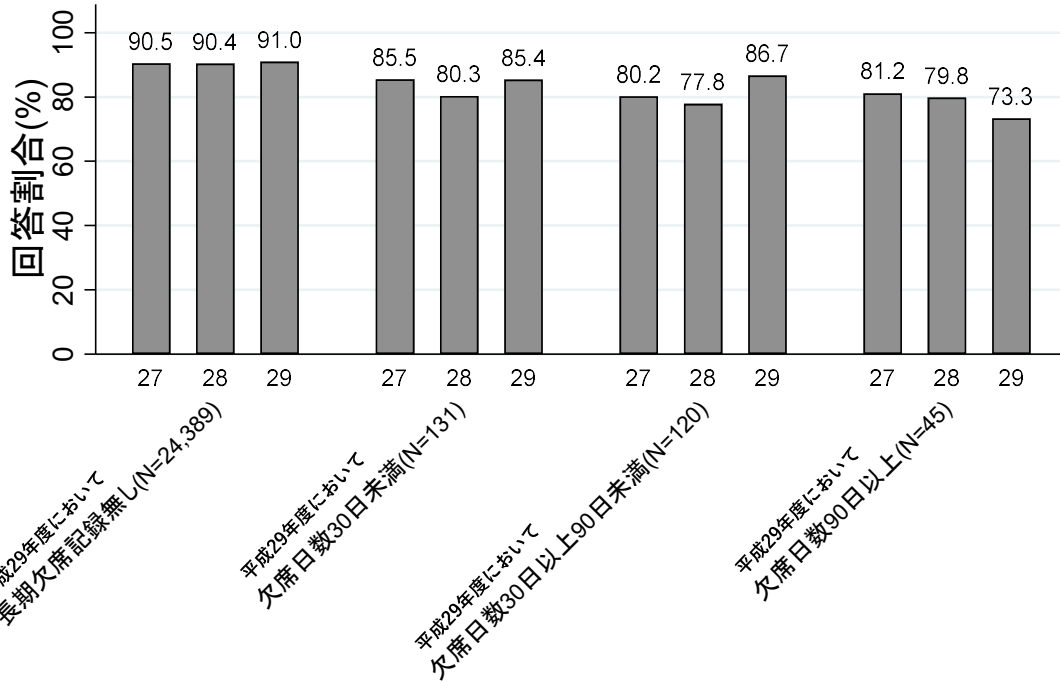
平成29年度において
欠席日数90日以上

Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』 & 2017年度『H29長期欠席者リスト』

(4) 小／中学校、長期欠席状況別、直近3年間の学校に対する意識

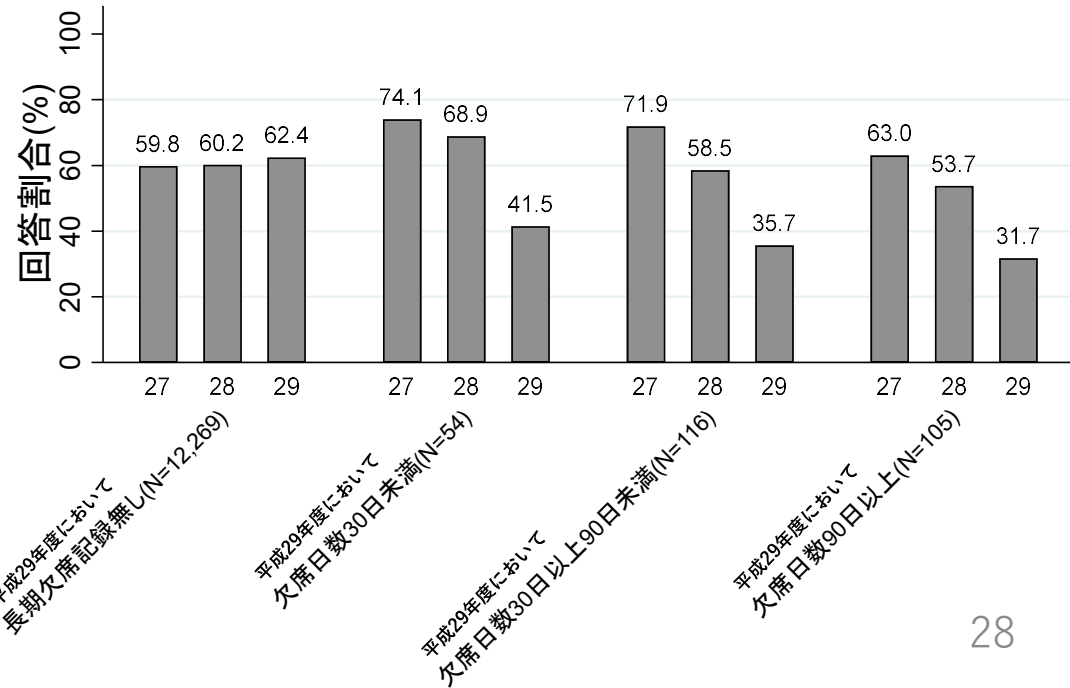
- 小／中学校別、長期欠席状況別に見ると、長期欠席記録のある児童生徒の方が、学校に行くのが楽しいと回答する比率が低い傾向にあることがわかる。
- 小学校ではあまり大きな変化はないが、中学校では長期欠席記録のある児童生徒で、年々、「学校の勉強が楽しい／学校の授業は楽しい」と回答する比率が低下傾向にあることがわかる。
- 長期欠席記録のある児童生徒で、「毎日朝食を食べる」「朝と夜、歯磨きをしている」「普段の睡眠時間が8時間以上」も同様の傾向がある。

長期欠席状況別、直近3年間の「学校へ行くのは楽しいわりと楽しい」回答割合(小学校)



Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』 & 2017年度『H29長期欠席者リスト』

長期欠席状況別、直近3年間の「学校の勉強は楽しい／学校の授業は楽しい」回答割合(中学校)



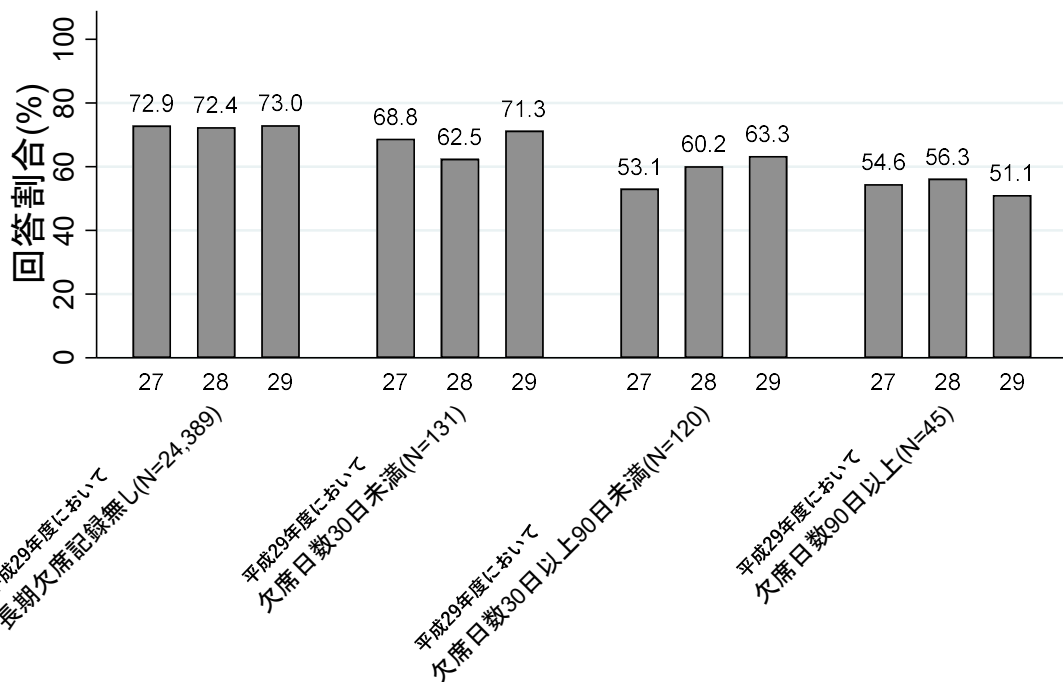
Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』 & 2017年度『H29長期欠席者リスト』

(5) 小／中学校、長期欠席状況別、直近3年間の自己肯定感

※標本数は「学校に対する意識」と同様

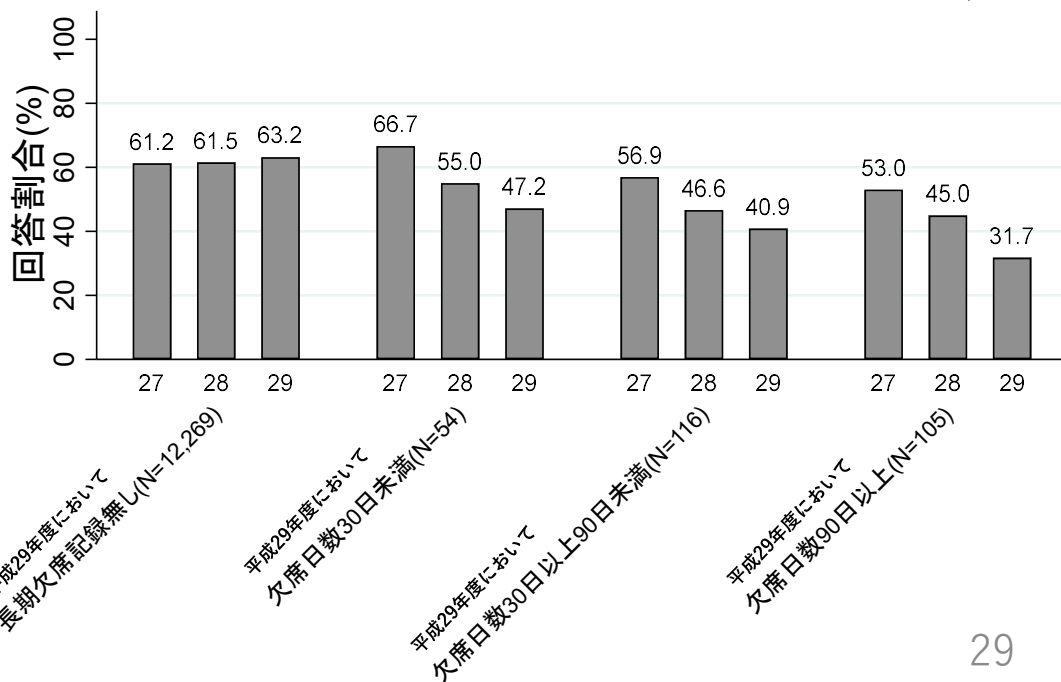
- ▶ 小／中学校別、長期欠席状況別に見ると、全般的に「自分にはよいところがある」と回答する割合が低い傾向にある。
- ▶ とりわけ、中学校では欠席日数が長期化するほど、経年的に自己肯定感が希薄化している様子が明確にみとれる。
- ▶ 「大人になった時の夢や目標をもっている」「難しいことに積極的に取り組む姿勢」も、同様の傾向である。

長期欠席状況別、直近3年間の「自分にはよいところがある」回答割合(小学校)



Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』 & 2017年度『H29長期欠席者リスト』

長期欠席状況別、直近3年間の「自分にはよいところがある」回答割合(中学校)

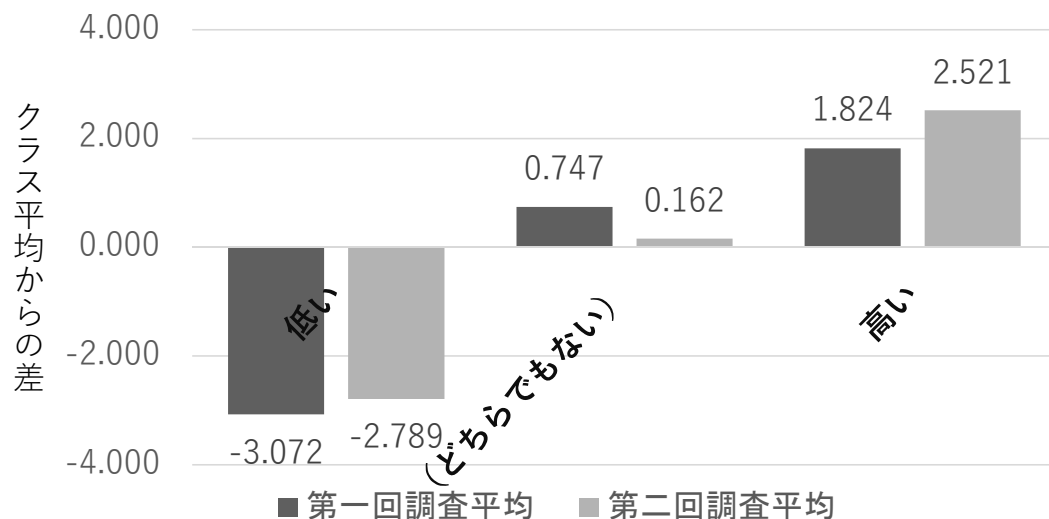


Source: 2010-2017年度『足立区基礎学力定着に関する総合調査』 & 2017年度『H29長期欠席者リスト』

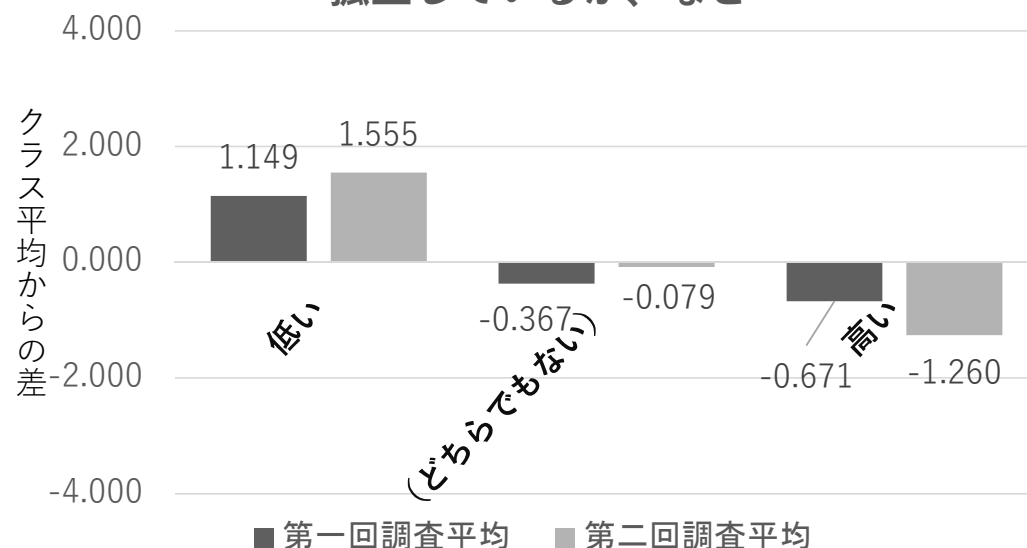
【参考】 QU調査の結果と成績（数学）との相関

- 成績下位25%点未満を「低い」、上位25%点以上を「高い」とした（低い188名、どちらでもない285名、高い205名）。
- 成績が「高い」ほど、人間関係良好、孤立傾向弱い。
- 縦軸の値は、左図の3.0ポイント、右図の2.0ポイントが、偏差値（平均50、標準偏差10）の2.5ポイントに相当する。
- 国語でも同様の傾向にある。

クラス内の友人・担任との関係が良好か、など



クラスの人からからかわれたり、孤立しているか、など



4 学力定着のための事業に関する 児童生徒の追跡調査結果

事業内容・分析手法

1 分析対象とした事業の概要

(1) あだち小学生基礎学習教室（小3・小4対象）

目標：小学3年までに習得すべき基礎的な内容である「四則計算の基礎（算数）」と「漢字の書き取り（国語）」の定着

規模：前期と後期、それぞれ半年で1回90分を15回、1校につき上限20名

(2) 中学生補習講座（中2対象）

目標：中学1年までに習得すべき英語と数学の基礎学力の定着

規模：夏季休業中の5日間、1校につき上限50名

(3) 中学夏季勉強合宿（中1対象）

目標：算数・数学のつまずきの解消と基礎学力の定着

規模：4泊5日、各校5名程度

2 分析手法・留意事項

(1) 事業ごとに3年分の児童生徒について、受講した群と受講しなかった群に分け、区学力調査の目標点通過率や意識調査の結果を受講前後で比較した。さらに、就学援助の受給状況別でも分析を実施した。

※就学援助の受給状況別の分析については、標本数が少ない群もある。受給状況別の分析結果が「可能性はある」という表現になっているのはこのことによる。

(2) 単純な受講前後の比較だけで事業の効果を読み取ることは困難であることには留意が必要である。

- ・受講した群には、つまずきの解消と基礎学力の定着を図る必要がある児童生徒が選ばれているため、受講後においても受講しなかった群と比較して点数や点数の伸びが低いといった状況は十分に起きうる。

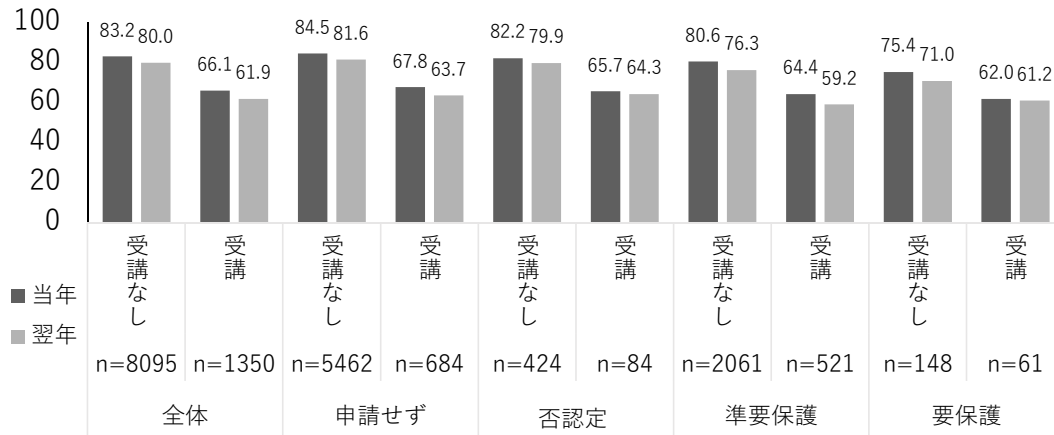
追跡結果のまとめ

	事業名	個別分析結果
(1)	小学基礎学習教室（小3・4）	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体として、学力の下支え効果を持っていた可能性が高い。 ● 小3では算数、小4では国語について、それぞれ受講した児童全体の目標点通過率が、受講なしに比べて相対的に上昇している。 ● 自己肯定感や休日の勉強時間について、全体的には大きな差異は見られない。 ● 要保護では、受講した児童の自己肯定感や休日の勉強時間にプラスの影響を与えた可能性はある。
(2)	中学補習講座（中2）	<ul style="list-style-type: none"> ● 全体として、学力の下支え効果を持っていた可能性が高い。 ● 特に英語では、受講した生徒全体の目標点通過率が相対的に上昇した。 ● 意識等に関する各項目について、全体的には受講生徒と受講しなかった生徒とで大きな差異は見られない。 ● 要保護では、受講した生徒の自己肯定感にプラスの影響を与えた可能性はある。
(5)	中学勉強合宿（中1）	<ul style="list-style-type: none"> ● 受講した生徒全体の数学の目標点通過率が上昇しており、学力の下支え効果を持っていた可能性が高い。 ● 「勉強を教えてくれる人がいない」と回答した割合について、受講した生徒全体では相対的に上昇している。 ● その他の意識等に関する項目については、全体的には受講生徒と受講しなかった生徒とで大きな差異は見られない。 ● 要保護では、受講した生徒の「勉強は大切だと思う」意識にプラスの影響を与えた可能性はある。

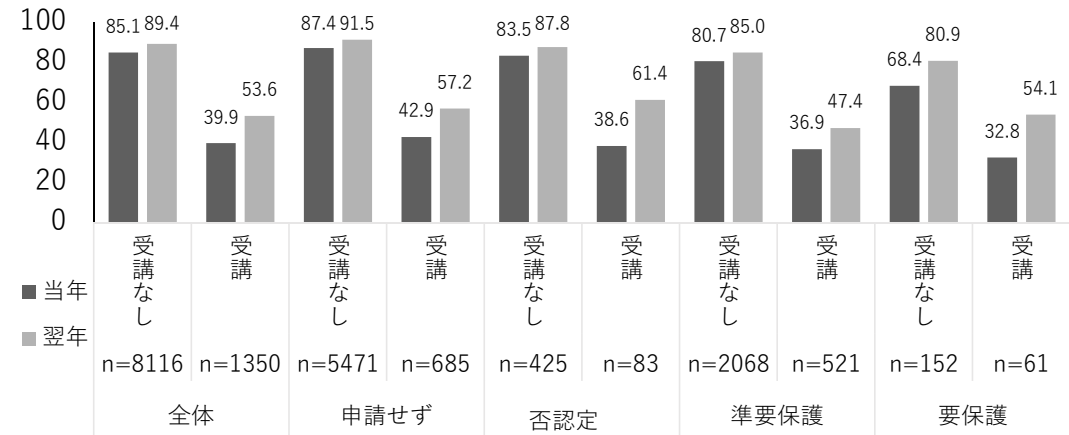
(1) - 1 小学基礎学習教室：通過率

- ▶ 全体として、学力の下支え効果を持っていた可能性が高い。
- ▶ 小3では算数、小4では国語について、それぞれ受講した児童全体の目標点通過率が、受講なしに比べて相対的に上昇している。

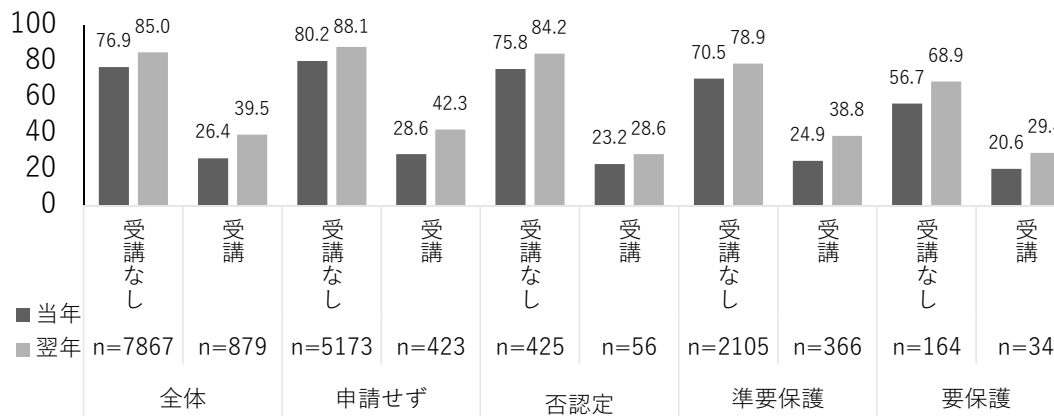
小3国語・通過率 (H26-H28)



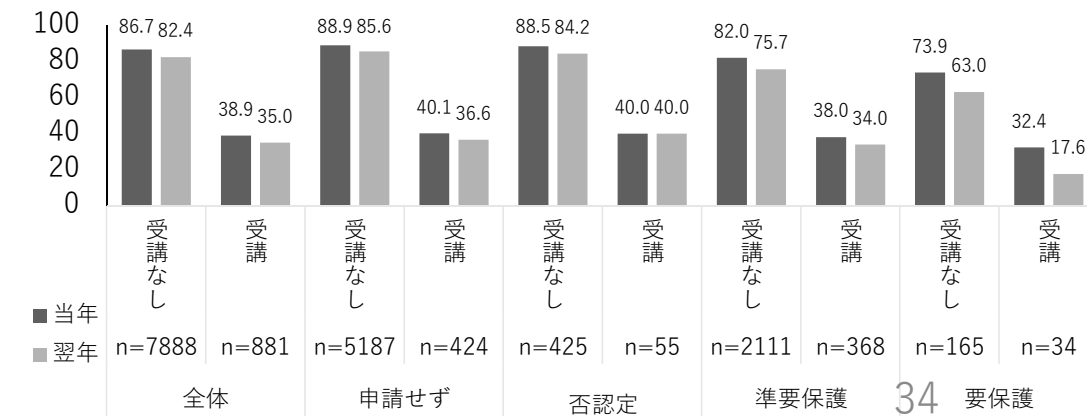
小3算数・通過率 (H26-H28)



小4国語・通過率 (H26-H28)



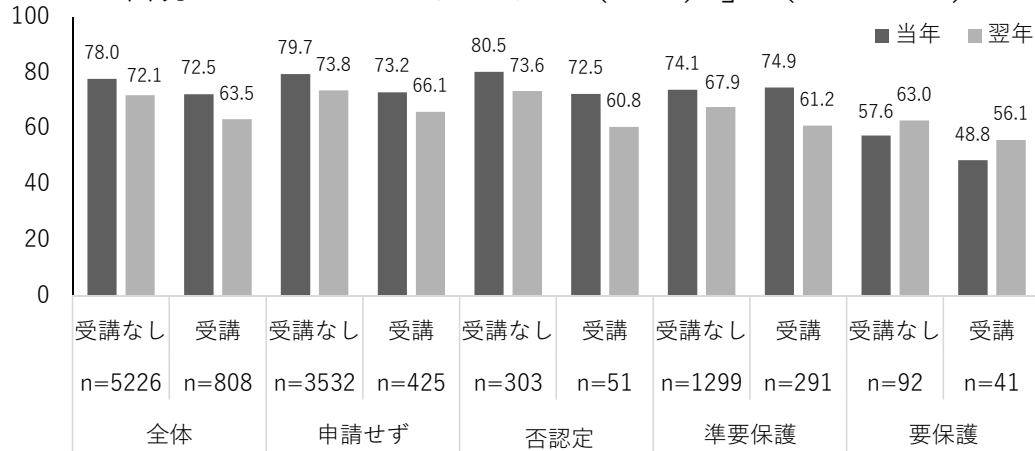
小4算数・通過率 (H26-H28)



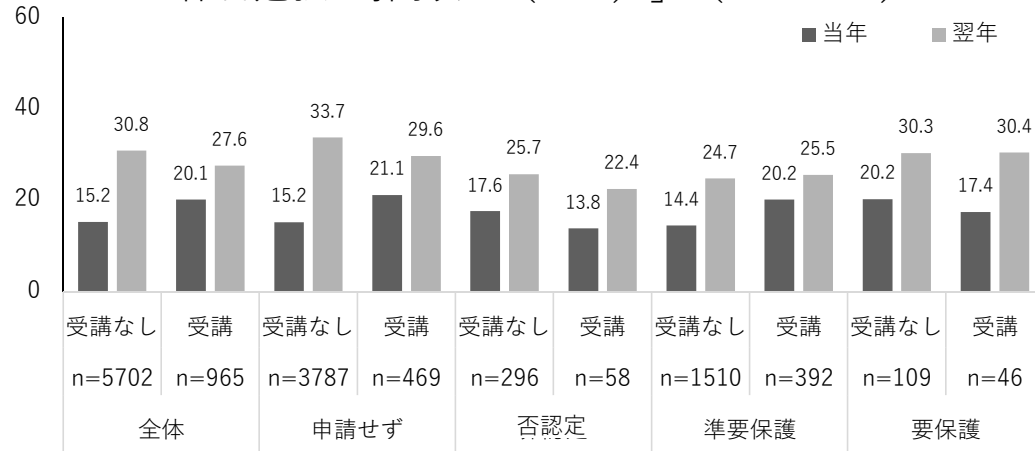
(1) - 2 小学基礎学習教室：意識・勉強時間

- ▶ 自己肯定感や休日の勉強時間について、全体的には大きな差異は見られない。
- ▶ 要保護では、受講した児童の自己肯定感や休日の勉強時間にプラスの影響を与えた可能性はある。

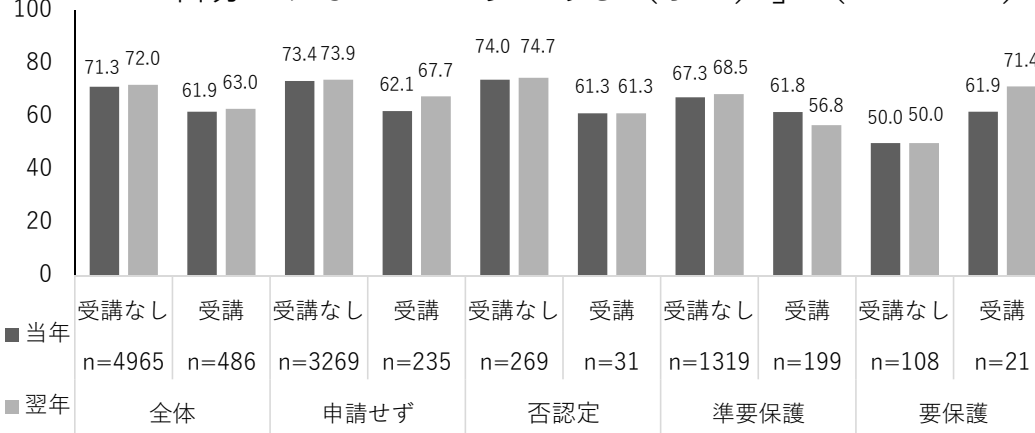
「自分にはよいところがある（小3）」（H26-H28）



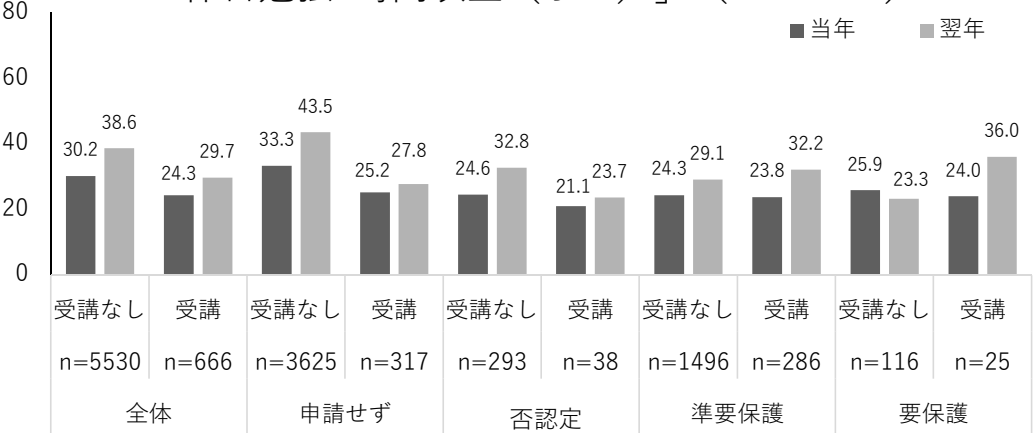
「休日勉強1時間以上（小3）」（H26-H28）



「自分にはよいところがある（小4）」（H26-H28）



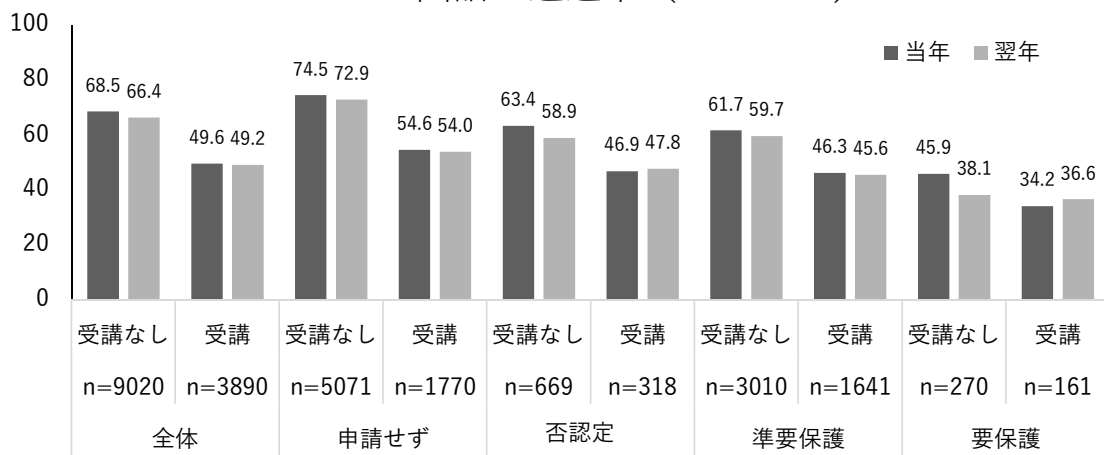
「休日勉強1時間以上（小4）」（H26-H28）



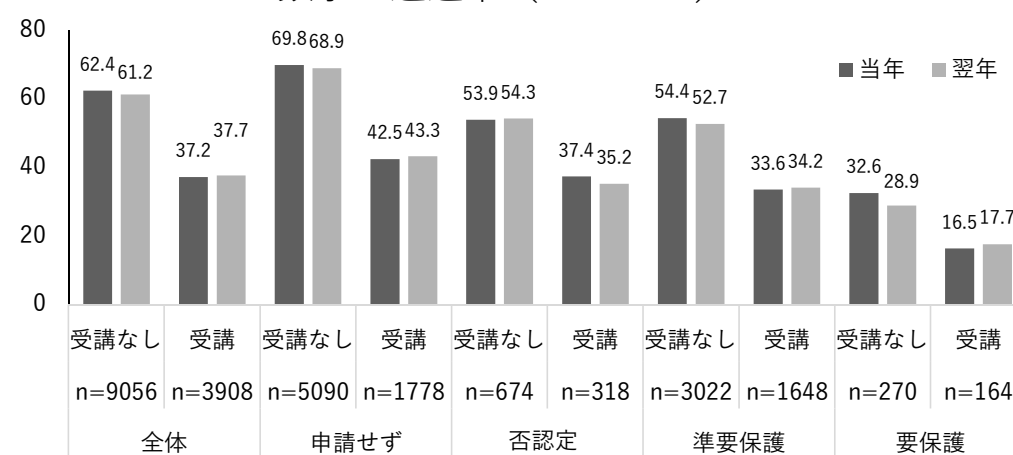
(2) - 1 中学補習講座（中2）：通過率

- ▶ 全体として、学力の下支え効果を持っていた可能性が高い。
- ▶ 特に英語では、受講した生徒全体の目標点通過率が相対的に上昇した。

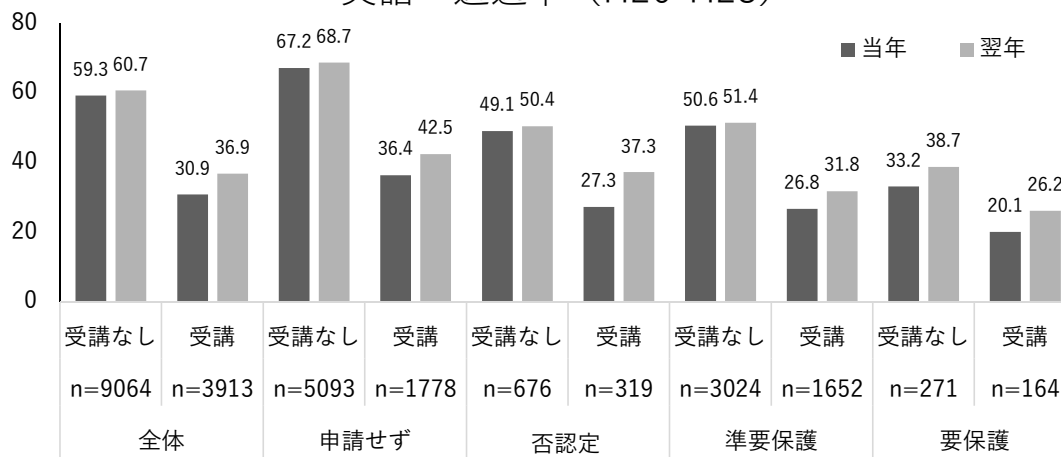
国語・通過率（H26-H28）



数学・通過率（H26-H28）



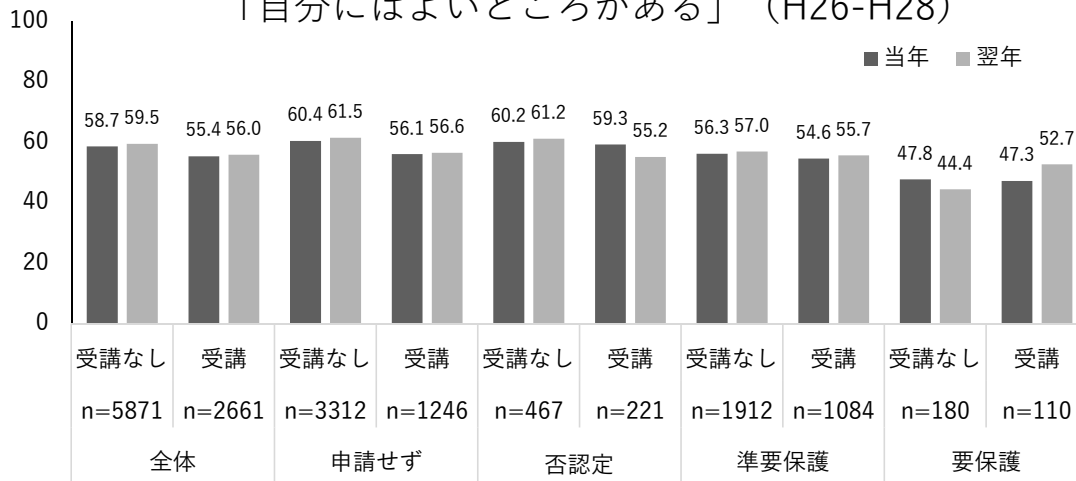
英語・通過率（H26-H28）



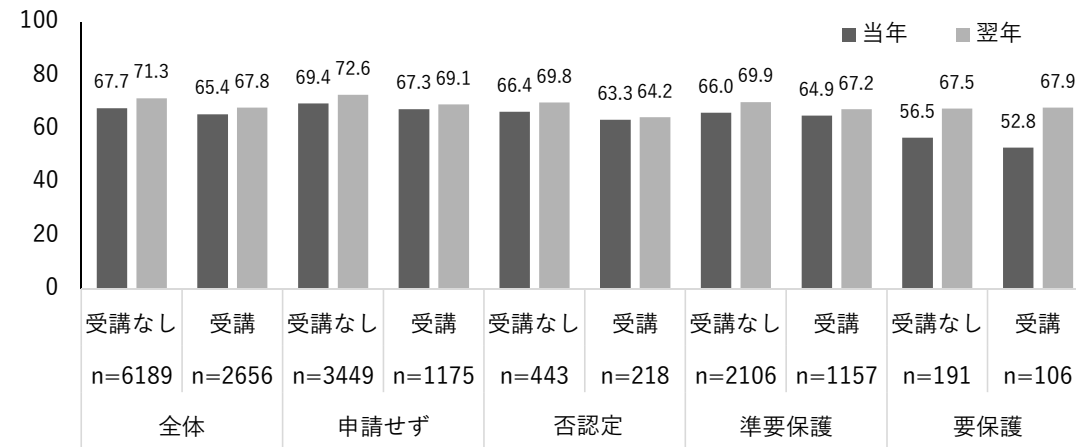
(2) - 2 中学補習講座（中2）：意識・勉強時間

- 意識等に関する各項目について、全体的には受講生徒と受講しなかった生徒とで大きな差異は見られない。
- 要保護では、受講した生徒の自己肯定感にプラスの影響を与えた可能性はある。

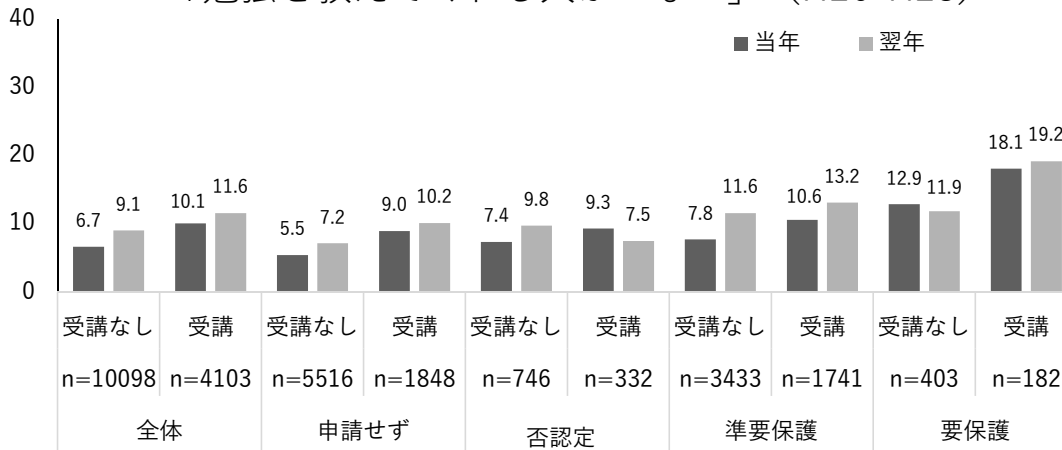
「自分にはよいところがある」（H26-H28）



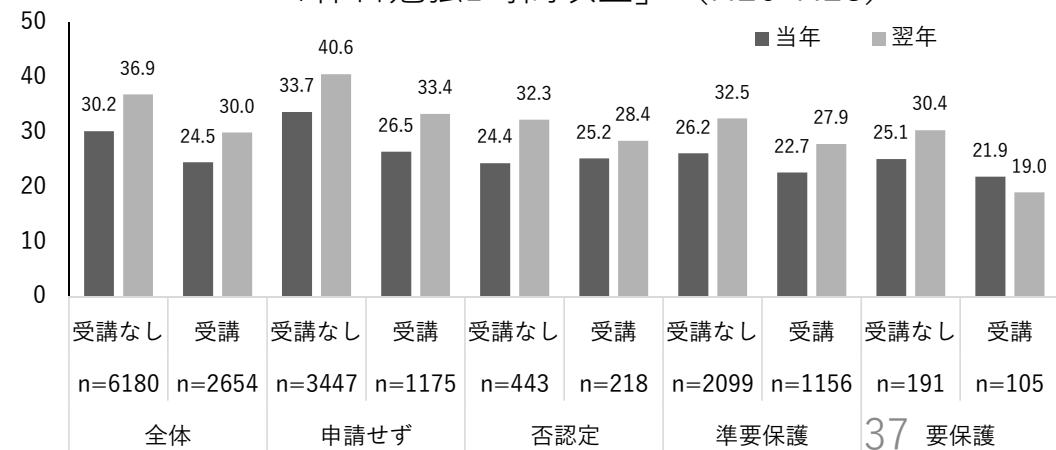
「勉強は大切だと思う」（H26-H28）



「勉強を教えてくれる人がいない」（H26-H28）

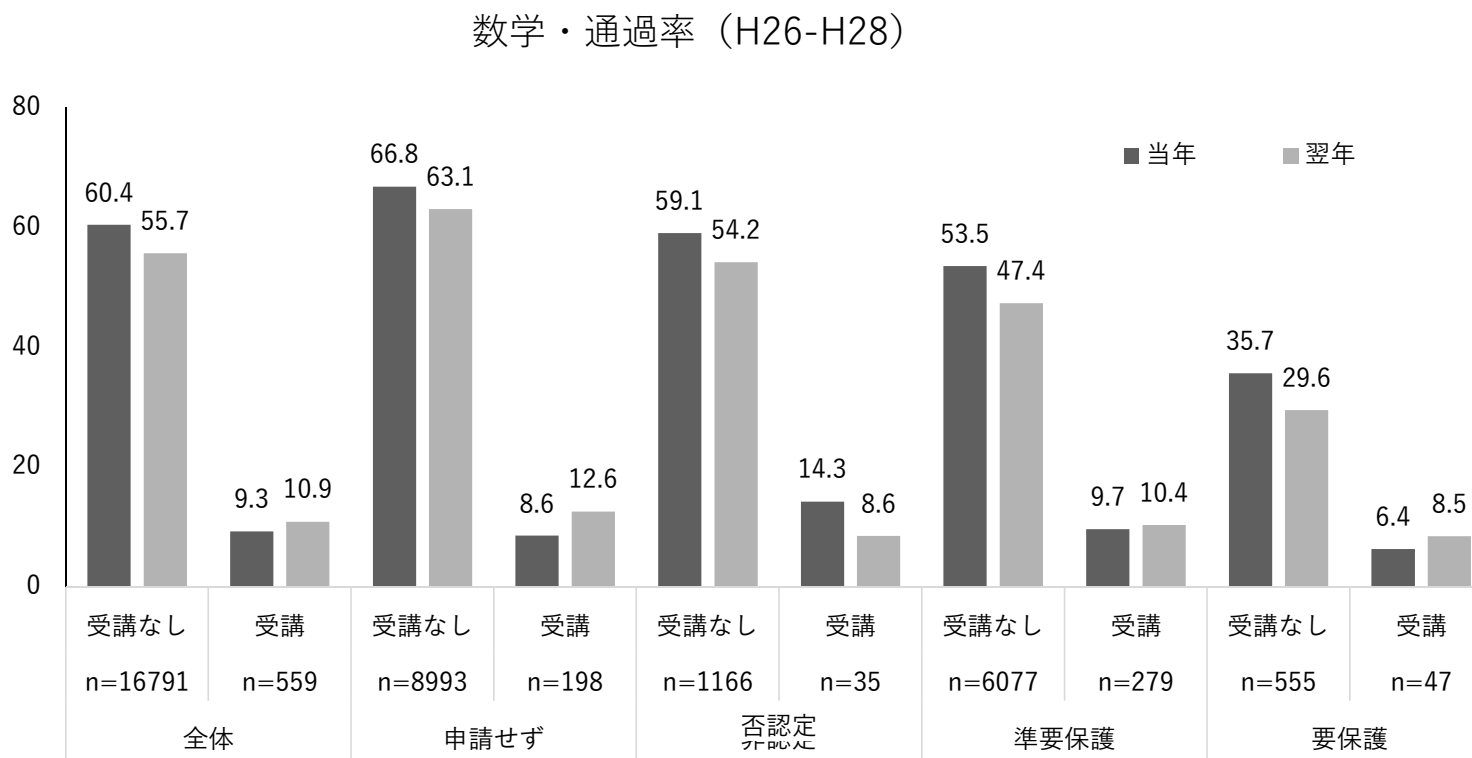


「休日勉強1時間以上」（H26-H28）



(3) - 1 中学勉強合宿（中1）：通過率

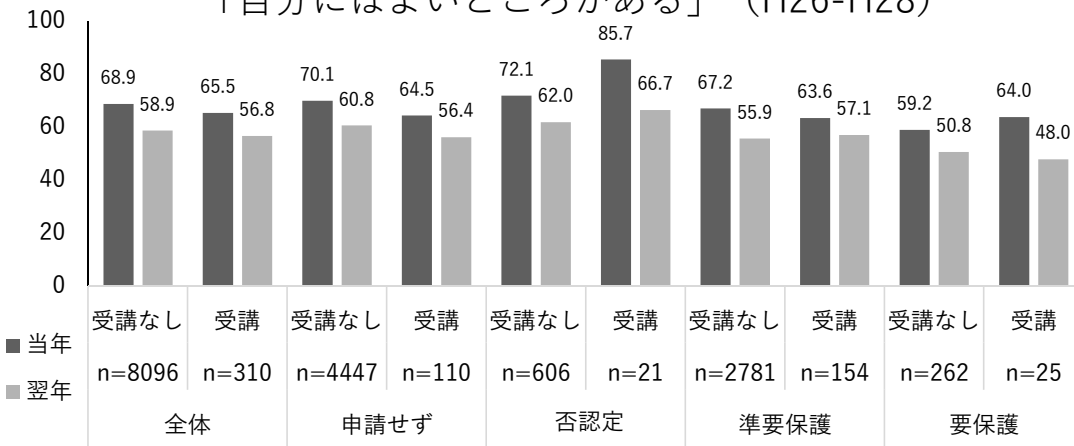
▶ 受講した生徒全体の数学の目標点通過率が上昇しており、学力の下支え効果を持っていた可能性が高い。



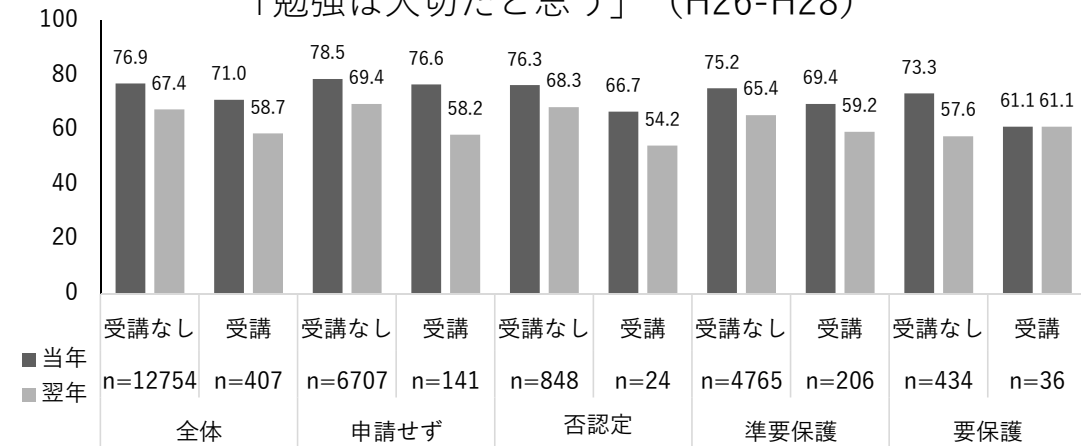
(3) - 2 中学勉強合宿（中1）：意識・勉強時間

- 「勉強を教えてくれる人がいない」と回答した割合について、受講した生徒全体では相対的に上昇している。
- その他の項目については、全体的には受講生徒と受講しなかった生徒とで大きな差異は見られない。
- 要保護では、受講した生徒の「勉強は大切だと思う」意識にプラスの影響を与えた可能性はある。

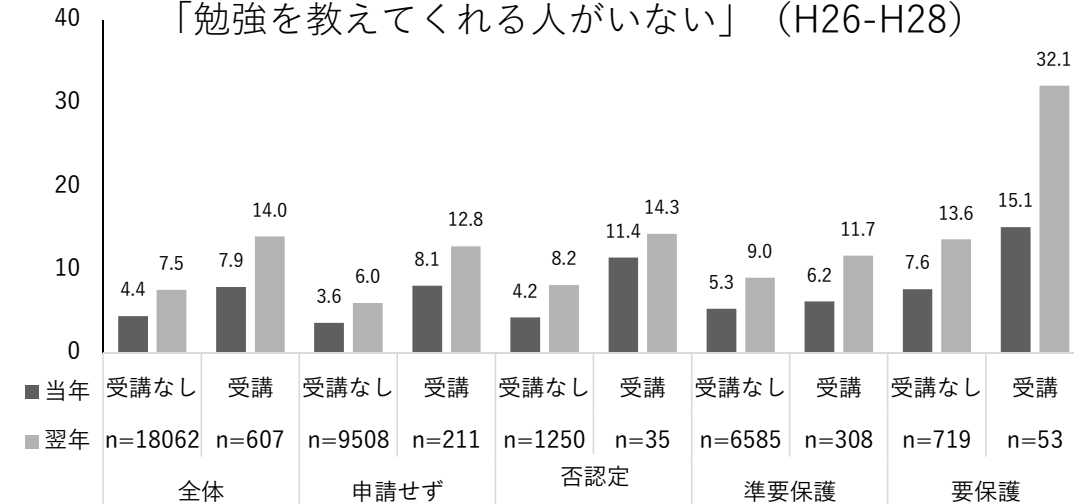
「自分にはよいところがある」（H26-H28）



「勉強は大切だと思う」（H26-H28）



「勉強を教えてくれる人がいない」（H26-H28）



「休日勉強1時間以上」（H26-H28）

